
けいおん！ ～義の心と愛する馬鹿たち～

劉輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ ～義の心と愛する馬鹿たち～

【Nコード】

N2143Q

【作者名】

劉輝

【あらすじ】

彼は義のために戦ってきた、だが軽音部の皆に出会い変わった

「俺は義のため…守る者のために戦っているんだ!!」

1話「プロローグ」(前書き)

どうも、劉輝です。

小説を書くのは初めてなので温かく見守ってください。

1話「プロローグ」

俺の名前は今田三成、桜が丘高等学校の2年生だ。
さっそくだが、俺は今追われています。
えっ？誰に？それは…

（1時間前）

「さて、帰るか」

俺は鞆と『ギターケース』を手取る、そして教室から出た時だった。

「確保おー！！」

と俺に目掛けてカチューシャを付けた女が飛んできた

「フン！甘いのだよ！！」

俺はすぐに回避した、正直言うどびっくりした、ふ…不義だ。

「くそお…確保失敗したあゝ！」

「はっはっは！甘いぞ！『田井中律』！この俺がそんな策で落ちると思うな！」

俺は田井中を高らかに笑った。

「ふっ…」

すると田井中は俺の後ろをみながら笑っている。
うっ、何だ？俺は後ろをそっとみた。

「「確保おおー！！」」

「ぬおおおおー！！！！」

なっ、何と後ろには田井中と同じ軽音部の『平沢唯』と『琴吹紬』
が大きな虫網？を俺に向けて振り下ろしてきた！
俺はそれを横に足を上げて回避した！っっーかそのデッケェ網何処
からもってきたんだ！？

「ああ、はずしちゃったあ」

「あっぶね」

俺は3人から距離をおく。

「いい加減につかまれよ！今田！」
「断る！」

俺はそのまま背を向けて逃げた

「あぁっ！逃げた！」
「追うぞ！」

田井中達は俺を追ってきた

〽回想終了〽

とまあこんな感じで今俺はその軽音部の奴等に追われてんだ…理由は俺が持つてるギターケースなんだろうな……
おいそこ女子に『追っかけられて幸せな奴』と思うなよ、この追っかけっこはもう10日も続いてんだからな！！

「もう勘弁してくれええ！！！」
「」「待てえええ！！！」

ここまで嫌がってる奴を追う奴いたんだなあ…不義だぜ…
俺はその後なんとか逃げ切った。

「たしか今日は金曜日だよな」

俺は家のカレンダーを見ながら言う。

「そう言えばあいつ（田井中）が『明日お前の家に行ってやる!!』とか言ってたが…じ、冗談だよなあ」

俺は少し田井中に恐怖を感じながら俺は眠りについた

～次の日～

寝れなかった…
なさけねーなあ、たかが馬鹿達の冗談にビクビクして…

「とりあえず顔を洗うか」

洗面台で顔を洗い、メシを適当に食って、服を着替えた。

「あ…暇だ…」

やる事がなくなると、何でもしように何かやりたくなるんだろうなあ。
あ。

「…とりあえず、どっかに行くか」

俺は外に出て鍵をかけて歩きだす、その時だった

「うん…？（目の前に人が…）」

よく見るとそこにはあの軽音部の田井中と平沢と琴吹と秋山と中野がいた。

マズイ！！俺はすぐに家に戻った！

「ヤバイ！あいつ等マジできた！！」

俺は慌てふためいた！

オイッ！『よかったな』とか思ってる奴、よかねーよ！！！！

「おい、今田あー！」

田井中の声だ！もう来たのかよ！！

どうする、俺！？どうするよ！？

選択し

『居留守』

『そのまま出る』

『死ぬ』

絶対どれを選んでも死ぬ！！
結局俺の負けで終わった。

「…ほら、これでいいか？」

俺は田井中に降伏届をさし出した

「まいどあり〜♪」

こうして、俺は負けてしまった。

「やれやれだ…不義だ」

また面倒なことになってしまった…

1話「プロローグ」(後書き)

次はキャラ紹介を書きます。
ではまた次回！

番外編「キャラ紹介」(前書き)

最近肩が痛い…でもがんばるしかない!!
と言うわけで番外編です!!

番外編「キャラ紹介」

いまだみつなり
今田三成

桜が丘高等学校の2年生

軽音部ではギター担当

武術にたけており特に槍と大剣が得意。

義の志を持った義士だが、性格はSな方

さらに毒舌でもある

早く言うとツンデレである

だが人との縁は大事にする。

学力は中の上でテストでは450点以上は取る。

一人暮らしをしているため家事はお手の物、料理もできる、さらに

彼には義理の姉妹がいる。

だが彼はひとつだけ苦手な物がある、それは姉である。

髪の毛は茶色でロング長いリボンでくくっている

ひらさわゆい
平沢唯

原作通り

あきやまみお
秋山澪

原作通り

田井中律
たいなかりつ

原作通り

琴吹紬
ことぶきつむぎ

原作通り

中野梓
なかのあずさ

原作通り

番外編「キャラ紹介」(後書き)

「劉輝..疲れた」

「三成..次はいつだ？」

「劉輝..わからん」

「三成..おい..」

2話「ここってホントに軽音部？」（前書き）

どうも、劉輝です

毒舌キャラって複雑だよね

ああ…三国無双してえ…

そんなわけで第2話です！

2話「こってホントに軽音部？」

「はあ…」

俺は机にうつぶせながらため息をする。

「おっ、どうした三成そんなに暗い顔で」

「うっさい…」

今俺に話かけてきたのは悪友の『杉山竜司』すぎやまりゆうじ

俺に色々問題を持つてくる

そして生徒会から目をつけられている

前の文化祭の時に無許可で花火を上げやがったんだ

俺も手伝ったんだが、俺も生徒会に目をつけられた、おかげで俺まで生徒会のブラックリストにのってしまった

まるであの桜が1年じゅう咲いているマンガのキャラみたいだ…

「なんだ？軽音部に入ったんだろ？」

ともう一人が言う

こいつも俺の悪友だ

さかたこたろう
『坂田小太郎』

俺によくからんでくる、正直言ってウザイんだが根はいい奴だ
だけど、こいつはテストの前日に俺に助けてと言ってくる

これを直してくれたらいいのに…

「いや俺は直す気はない！」

「人の心を読むな」

「それで、何悩んでんだ？」

「実は…」

俺は軽音部のことを話した

「いいじゃないか！ハーレム状態！！」

よし、馬鹿は殴ろう…いや…死刑だ！

「オイ…小太郎、そこになおれ」

「はっ？」

ドカツ！！バキッ！！

さて、馬鹿は調教したし、次の授業の準備でもするか…

くそして放課後く

もう放課後だよ…

「部活…行きたくねえ…」

そんな重い足を上げ音楽室に向かった
だが……

「…どうしよう…」

いざ行くととなるとドアが開けねーッ!!

「大丈夫…落ち着け」

俺はそう自分に言い聞かしドアノブに手をやった！
いざッ！出陣！！！！
ガチャ

「おっ来たか！」
「よ、よう」

俺は五人に手を振りながら椅子に座る
うん？机にキーキがあるがなんだ？ここホントに軽音部か？

「どうぞ」

と琴吹が俺の前に紅茶が入ったティーカップをだした
はっ？

ナニコレ、おかしいと思うのは俺だけか？！

「あの…これ」

俺は琴吹の方を向いて言う

「おいしいですよ」

と笑顔で言う琴吹

いやいやそういう意味じゃなくて…

「なあ、これ…」

俺は一番まじめそうな秋山に言う

「まあ…何と言うか…」

言葉にしにくいんだな
帰っていいかな？

「おい、ここ軽音部だよなあ」

「うん、そうだよ」

「練習は？」

「そうです、練習しましょう！」

おお、中野もそう思っていたか！

…だがケーキ食った奴がそんなこと言っても説得力がねーよ…

「だいたいこんなことにてて顧問に怒られないのか？」

「ああ、大丈夫大丈夫だっていつもこんな感じだし」

いつも！？

よく怒られないなあ

「どんな顧問だよ」

俺は腕組をして呆れた顔で紅茶を飲む
おっ、以外とうまいなあ

「まあ、少しぐらいは練習しないか？」

秋山が田井中に言う
やっともともになりそうだ

「えー今日はもういいじゃーん」

ブチッ

俺の何かが切れた

「なあーに言ってるかー!!」

俺はドン！と机に片足を上げて大声をあげた
ビクッ！

みんなは驚いた顔で俺を見る

「田井中！！お前部長だろうが！お前が隊をまとめなければ誰が隊をまとめんだあ！！」

いいかあ？戦いに必要なのは数じゃない
軍をまとめる隊長だ、いいかあこの隊の隊長は田井中お前だあ！お前がしっかりしないとこの部だって潰れちまうぞ！！」

「はっ、はいいー！！」

田井中は俺の気合に押されたのか土下座をした

そして他のみんなも土下座をしていた

「わかればいい」

俺はみんなに手をさし出した

「でも戦いは関係ないよね」

と田井中のつつこみが入った時下校のチャイムがなった

2話「こってホントに軽音部？」（後書き）

劉輝「どうも〜…」

三成「なんだよそのやる気がない返事は」

劉輝「…だってこれ書き終わった夜の12時だぜ」

三成「馬鹿が…」

劉輝「なんだと！」

三成「うるさい、KUZUがッ!!」

バキッ!

劉輝「ギャアー!!」

三成「というわけでまた次回！」

3話「バイトとは危険なものだ」(前書き)

どうも、やっと終わった…

もう最後はグダグダです

第3話はじまります

3話「バイトとは危険なものだ」

あの後結局練習はできずに帰ってしまった
俺は今バイトに行っている
えっ、何のバイトか？
それは…

「こちらレイザーチームだ、応答しろ三成」
「こちら三成だ」

俺は今廃校になった小学校の前にいる
そこには特殊部隊が学校の外にいた
そう、俺は特殊部隊に隊員なのだ

『よっしゃッ！んじゃ行こうぜ！！』 「うるさいんだよ気づかれたらどうすんだ馬鹿」

俺は無線を通じて馬鹿に言う
さっき話をかけてきたのは俺の戦友『神崎悟』
一応俺と同じ年だこいつは俺と同じチームだ

「…ふっ……」
『なんだよ、レイ！』
「いや、言いたいことは吹っ飛んだ、『馬鹿の横槍』でな」

そして俺の横にはチームメイトの『松木レイ（まつきれい）』だ
二人共、俺の戦友だ

「んじゃあ…」

「行くか！」

その言葉と共に合図を出し、俺は扉を壊し中に入る

あたりは暗く視界がきかない
しかたないと思いハンドガンに付いているライトを使いあたりを照らす

あたりは窓のガラスや紙などが転がっていた

「足元に気をつけろ」

『うっ、うわっ！』

「どうした？」

『し…死体だ…しかもまだ新しい…足を切られて動けないところをやられたと思われる』

こ…怖え、考えただけで鳥肌が立つ…

たぶん今回の『ヤツ』は大きなはさみを持ってると思っ間違ったな
いだろう

えっ？何がって？

それはこれから知ることになる

その後俺達は近くにあった理科室に入る

中は廊下と変わらず、ガラスの破片や椅子が散乱していた

「荒れてるな」

「皆、足元に気をつけろよ」

レイはみんなに注意しながら歩き出す

…田井中もこんぐらいのリーダーシップがあつたらなあ…

「おいっ、三成！」

「う、うん!？」

「ボーツとしてないで行けよ」

「んだよ、別にビビってねーよ」

そう言い俺は銃を構えて歩き出す

クチャ…

うん? クチャ?

「おい、何か聞こえないか？」

「はっ？」

レイは目を閉じて耳を傾ける

……クチャ…

「ああ：聞こえた」

俺達はアイコンタクトをして合図を送る
ついに来たか：『あいつ』が

俺達は背中合わせになり銃を構える
緊張のせいか俺の心臓の鼓動がはっきり聞こえる

「どうした、怖いかな？」

「フン：誰かな？」

「相変わらず素直じゃねーなあ」

「撃ち殺されたいかな？」

：だからこいつとチームは嫌だったんだ：

『うわああ！く、「クリーチャー」出現！ただちに討滅する！』

無線の声と共に銃声が響いた

その時、俺の目の前に赤く光った目が見えた

「あそこだっ！！」

俺が叫び目があったところを指さす
そして一斉に銃の連射をする

「出口に向かえ！グレネードを使う！！」

レイが叫ぶと隊員たちは銃撃をやめて、理科室から出ていく

「先に行け！」

俺は銃撃を続け、レイを先に出す

カチッ！

銃の弾が切れやがったああ！！

俺はハンドガンを捨てて背中にかけてある大剣を取る

この大剣は俺の家に伝わる武器だ、切れ味は良いがやっぱり重い…

俺は思いつき大剣を横に切る

グチャ！

何が切れたかわからんが何かが切れた

「三成！来い！！」

出口を見るとレイが手を振っている

俺は全力疾走で出口に向う

「ぬおおおおー！！」

ハリウッドダイブしたとき、俺の後ろが爆発した！！
あたりは煙でおおわれる

『クリーチャー撃破！』

「こちらも撃破、これより帰還する」

こうして仕事は終わった。

俺達が戦っていたものは『クリーチャー』と呼ばれる化け物、体にあるミトコンドリアという細胞しウイルスによって凶暴化したものである

何のために作られたか、何でこんなところにいるのかは不明だ、

俺はそのクリーチャーを狩るのが仕事である

ただ、このウイルスは二重感染はしないのがラッキーだ。

そのあと、俺は悟とレイの三人で飯を食いに行っていた

「いやゝ疲れたよ」

悟がドリンクを飲みながら言う

「にしては大きい悲鳴だったな」

「お、お前！それは…」

ホントにでかかったなあ…

俺はふとファミレスの入口を見る、そこには女子高生が…うん？たしか…あの征服…桜が丘校の…うん！？そこにいたのは軽音部の秋山と田井中がいたああ！！！！マズイ！こんなところ見られたら明日面倒なことになる！

「どうしたんだ？顔が青いぞ」

レイ、お前は知らないからいいよなあ！とにかく逃げないと…

「お、俺用事を思い出した！帰るわ！！」

俺は机に金を置きさろうとした

「あゝ！！今田！」

う…ばれた…後ろから田井中が俺を指差す
そして、いさぎよく俺は席に戻った

「……………」

「へえゝ、こいつが軽音部にねえゝ」

悟がニヤニヤしながらこっちを見る…後で潰す！
その後色々な質問を受けたがどれもごまかしたのは言うまでもない
：

3話「バイトとは危険なものだ」(後書き)

劉輝「最近やバいんだよ」

三成「何が？」

劉輝「遊戯王でかてねーんだ！」

三成「どうでもいいわ!!!」

劉輝「というわけで次回はフラグを立たせます！感想待ってます！」

4話「顧問で、なんだっけ？」（前書き）

最近肩が痛くてもうしょうがないよ！
そんなわけで、こんかいは三成の姿が…！

4話「顧問で、なんだっけ？」

フン…死にてえ…なあ…みんな…一つ聞いていいか？…顧問でなんだっけ？

今俺はなぜか『コスプレ』というのをしている

…いや、『している』ではなく、『されてる』だ。
なぜそうなったのかというと…

（2時間前）

「お…っす…」

俺はいつものように部室（軽音部）に足を運ぶ、こうやって嫌なの
に部室に行くのは俺がおかしいのか？
言っておくが俺はMではないからな！

「おい、練習しないのか？」

「それが、律がだだこねて…」

秋山が肩を落として言う。

しかたない…ここはおれが…

「田井中」

「なんだよ…」

俺は笑顔でそっ…と田井中の頭に手を置いた

「な…なんだよ／＼／／／」

田井中はなぜか顔を赤くした

？熱でもあんのか？

俺はそんなことを思いながら田井中に笑顔で言った

「つぶすぞ♪」

「ぐ…ごめんなさい…」

もう終わりか、弱い敵将だった。

あっ！そういえば…

「おい、お前ら演奏してみてくれ」

「え？何で？」

「俺、お前達の演奏ちゃんと聞いたことがない」
「聞けよ…」

「フン、俺は興味のないことは覚えん」

「言い方が腹立つ…」

だって本当のことだし。

「まあいい、中野も聞きたくないか？」

「えっ?! は…はい」

俺は椅子に座りお茶を飲む。

「じゃあ、俺から奏でてやろうか？」

俺は立ち上がり、ギターケースを開けてギターを取り出す。

「まあ…何だ、ここで昔話でもしようか…」

男は…守る物のために戦っていた、『大一大万大吉』彼はその言葉と友と共に戦った
そして、散って行った…

狭霧之彼方

立ちこめる霧が 眼の前広がる

我が道 行く手が 何故見えぬのか

揺るがぬ決意は 確かにあれども
聴こゆる今でも 我が友の呼ぶ声

ひとつの道しか誰も往けぬもの
己の信じる　そう道だけを

狭霧の彼方へ　我は向かう今こそ
ただ恩義を抱いて

譲れぬ意思を守り抜きて戦う
嗚呼　それを武士の道と呼ぶ　永久に」

俺が歌い終わるとみんなは目に涙を浮かべていた
：まあそうだろう：

「なあ、その歌：誰がモデルだ？」

秋山が言いにくそうに言う
：こんぐらいバラしてもいいか

「誰にも言わないか？」

「う、うん：」

「お前ら、関ヶ原で知ってるか？」

「たしか、天下分け目の大決戦で、石田三成の西軍と徳川家康の東軍の戦いのこと？」

さすが琴吹だ。

「その通り…そしてこの歌はその石田三成をモデルにしたもんだ」
「でも何でこの歌なの？」

平沢が問いかけてきたとき、俺は一瞬言うのをやめようと思ったが言うことにした。

「俺は…石田三成の子孫なんだ」

「」「」「えええー！！！！」「」「」

うるせえ…

「でも、苗字が…」

「俺の家は代々長男に『三成』という名を付けるのが掟なんだ
俺は23代目の三成、だがなあ、たかが石田三成の名前だけで人はなぜか俺を遠ざける…」

俺の親は俺を近くの家に置いて自殺した…
そしてその置いてくれた家が今田家なんだ」

みんなを見ると今にも泣き出しそうだ

「…別に、同情してくれなくていい…なぜなら俺は今幸せだと思ってる」

「」「」「えっ？」「」「」

ここまでハモる人見たことないぜ：

「ま…まあ俺の演奏は終わった、次はお前らの見せてくれよ」

俺はギターをおさめながら言う

「じゃあやるか！」

田井中がドラムスティックを持って言う
練習もこれくらい頑張ってくれたらなあ
俺はソファアに座りながら心の中で呟いた。

「1、2、3、4！」

「キミを見てるといつもハートDOKI☆DOKI
揺れる思いはマシュマロみたいにふわ☆ふわ
いつもがんばるキミの横顔

ずっと見ても気にしないよね

夢の中なら 二人の距離縮められるのにな

ああカミサマお願い 二人だけのDream Timeください☆

お気に入りのうさちゃん抱いて今夜もオヤスミ♪
ふわふわ時間^{タイム} ふわふわ時間^{タイム} ふわふわ時間^{タイム}

「どうかなっ!？」

平沢が歌い終わり俺に問いかける。

「うーん…あえて言うなら…鳥肌もんだ…かゆい」
「そっちかいっ!」

ボリボリと肌をかくおれなのだが…隣りの中野は目を輝かせていた。

「やっぱりすごいですっ!」

そうかな? 俺は痒くてしかたないのだが…
まあ人それぞれ好みは違うのが当たり前だからなあ

「そうだよねー!」

「それにくらべて…」

5人は俺を睨みだす。

「おい、睨むな、鬱陶しい」

「おまけにツンデレだよ」

「ッ! 俺はツンデレではない!」

俺は否定した、たぶん俺の顔は真っ赤だ

「顔が真っ赤だぞ」

秋山が鏡出し俺の顔を写す
見てみると顔は赤かった

「フン！」

俺は顔をそむきお茶を飲む。

「みっくん照れた」

…平沢なんなんだその呼び名は

「なんだよ…その呼び名は…やめてくれ」

「プツ…みっくんだって…」

腹をかかえて秋山まで笑いだす
秋山よ…どこが面白いのか具体的におしえろ…

「ええ…みっくんがいいよ！」

「みっくん照れた」

…平沢なんなんだその呼び名は

「なんだよ…その呼び名は…やめてくれ」

「プツ…みっくんだって…」

腹をかかえて秋山まで笑いだす
秋山よ…どこが面白いのか具体的におしえろ…

「ええ…みっくんがいいよ！」

「あっそうだ！」

田井中がなにかを思いついたかのような顔をする
何だ、またよからぬことを思いついたんじゃないだろうなあ…

「この際さあ今田も私達のこと名前で呼ぼうよ」

そうきたか…このデコ

「誰がデコだこの狐!!」

「フン、人は俺を狐と呼ぶ、言われ慣れてる」
「でもいいかも」

琴吹まで…

「んじゃあ決定！」

「わかったよ…」

ったく…面倒だなあ

「んじゃあ、唯」

「はーい！」

テンション高いなあ

「漣」

「な、なんだ…／／／／」

漣の顔が赤くなる

フン…慣れるのに時間かかるな

「次は…律」

「おう、三成！」

：ノーコメント

「次、紬」

「はい」

なんかこっちまでゆるんでしまいそうだ

「梓」

「はい、三成先輩！」

これで全員だな

「知遇を得てうれしく思う」

俺はみんなに一礼する

まあ、これから2年間この部で活動する仲間だからなあ

ああ、俺は今幸せかもな。

「お取り込み中悪いんだけど」
「うん？」

部室のドアのところに山中先生がいた

「その子が新入部員？」

俺のことを知っているのだろう、先生が言う

「はい、今田三成です」

俺は先生にも一礼した

「……」

先生は俺をじっと見ている
な、何だ？俺変なことしたか？

「あなた…メイド服が似合いそうね！」

「は…？」

いきなり何言うんだ？この人は

「ちょっとこれ着てみて！」

先生はどこからか出したメイド服を俺に差し出す

「ことわる!!」

「唯ちゃん!りっちゃん!」

「「はい!」」

唯と律は逃がすまいと俺の腕をつかむ

くっ!こいつら…!

やめろ!!!!!!

「アアアアアアー!!!!!!」

俺の断末魔は学校中に響きわたった。

〽回想終了〽

とまあ、こんな感じだ

それから俺は先生が持っていた衣装を小一時間着たりされていた
もうこいつを先生と呼ぶのをやめよう…

俺はそう心の中で誓った。

4話「顧問で、なんだっけ？」（後書き）

三成「何だ…この終わり方」

劉輝「色々ネタを使いすぎたからなあ」

三成「…朽ちるがいい!!」

バキッ!

劉輝「ギャアアアア!!」

5話「クズはおとなしくしてろ」 (前書き)

今回は毒舌全開です。

5話「クズはおとなしくしてろ」

「はあ…」

なぜかこの空間に慣れている自分が無様で腹が立つ
えっ？何になって決まってるんだろ、軽音部だよ

最（前からだが…）練習は俺が来ると慌ててお茶をしまい、いか
にも『今まで練習してました』みたいな空気を作るあの馬鹿ども（
唯と律）

あえて言おう。

「クズである」と！

俺は唯達に聞こえないように叫ぶ。

「えっ？何か言った？」

「いや、こっちの話」

俺はうまく誤魔化し、自分のギターの弦を取り換える。
ドン！

俺が最後の弦を付けた時、勢い良く部室の扉が開き

「今田三成！俺と決闘しろ！！」

とゴリラのような男が俺を指差し言う。

「俺か？ 用件は何だ」

「だから、俺様と決闘しろ！」

「理由は？」

「お前、武術やってんだろ！？ だったらどんなもんか見てやろうとな」

…何でお前がそんな上から目線で言うんだよ。

「フン、理由が浅すぎる…そんなんで武を競うなんて…不義だぞ」
「なんだ？ 怖気づいたか！？」

俺に喧嘩を売るような言い方で部員BとCが割り込む。

「……」

「次はビビって声が出ないってか！」

「「あっはっはっはっ！」「」」

……フン

「ちょっと！ あんたら…」

「律…」

律が言い返そうとしたのを俺が止める

「でも三成…！」

そんな、悔しくないのか！？っていう顔やめろ…

「フン…いいだろう…その決戦乗った」

「へっへっ女の子の前だからって格好つけんなよ！」

あいかわらずゲラゲラ笑うクズ共

「フン…不快な言いようだ、お説教だな」

「よし…だったら、今から体育館に来い」

「…上等だ…」

俺はそのまま体育館まで行った。

——— 濡side ———

私たちは三成のことが心配になり、一緒に体育館に行った。

「ルールはいたってシンプル、武器を使って相手を倒したほうが勝ちだ」

「剣法などは？」

「好きにしろ」

三成は首の骨をポキポキ鳴らして余裕を見せる。

「んじゃあ俺の武器はこれだ」

相手は腰にさしていた木刀を構える。

「…フン…」

一方、三成はなにやら大きい扇を出す
…って、扇！？

「おい、三成！？扇って…」

「何だ？その武器は！あっはっは！カッコ付けしいが…ふざけてん
じゃねーぞ！！」

ついに相手がキレた！

「ふざけてねーよ…いいから来いよ…クズが」

「んだとお!」

「なんなら、テメェら全員で来いよ」

三成は相手を挑発するように笑う。

「後悔すんなよ!おい、お前ら!!」

「「はい!」」

相手の後ろにいた人が木刀を構える。

「行くぞコラァァー!!」

三人が三成に突っ込む。

「……」

三成は扇を構えている。

「危ない!」

相手の木刀が三成に振り下ろされた。
パキン！

「つたく…うるさいなあ…」

そこには三人の木刀を受け止めている三成がいた。

「鬱陶しいんだよ…朽ちるがいい!!」

次の瞬間、三成は扇を広げて相手を一気に三人吹き飛ばした。

「「「うわぁ!」「」」

「もう終わりか、弱い敵だった」

相手をノックアウトして三成は扇をしまった。

私は安心して、胸を撫で下ろした。

———三成 side———

フン…やっと終わった

俺は扇を片手に持ち、ゴリラに近づく。

「おい…まだやるか？」

「い…いえ…もういいです」

「フン…ならいい」

俺はそのままゴリラと約二名を置いて行って部屋に戻った。

「三成…お前…Sだな」

「律、安心しろ、あんなのまだまだ力の半分もだしていない」

…まあ4分の1程度かな？

「「「「（この人を怒らすと怖いかも…）」」」」

「??:?」

こいつら、何で俺を見ながら怯えてんだ??

♪♪♪

いきなり俺の携帯が鳴る

誰からだ？

俺は携帯の画面を見てみた。

「……」

「?…どうしたの、みつくん、携帯出ないの？」

唯…出たいのはやまやまなのだが…

ピッ

「も、もしもし？」

『あっ三成君！？』

今、俺が電話している相手は俺の義姉さん『今田愛』だ…俺の唯一頭のがらん人だ
なぜ頭があがらないかと言うと…

『三成君、私今あなたの家にいるのよ』

「はっ！？か、鍵は！？」

『黙って合鍵作っておいた、私おいしいご飯作ってるから、早めに帰ってきてね！』

プチッ…プー…プー…

自分で言うのは嫌なのだが、実は義姉、愛姉は昔から俺のことを世話していたから、なぜかこのとしになっても俺の世話をしたがるんだ
まああえて言うなら『ブラコン』だ。

「すまん、俺帰るわ」

「えっ？何で」

「うちの義姉さんが家で待ってるんだ、だからこれでさらばっ！」

俺は逃げるようにその場をさった。

5話「クズはおとなしくしてろ」(後書き)

愛「私これだけなの!？」

劉輝「次回はすごいよ」

三成「何がどうすごいのか？」

龍輝「……ふふっ」

三成「何だよお前はっ!!」

6話「義姉弟は色々めんどい」(前書き)

今回は三成の姉と妹が登場です！

6話「義姉弟は色々めんどい」

あれから、俺はダッシュで家に帰り、愛姉に聞いたでした。

「何でアンタが俺の家の合鍵もってんだよ！」

「えゝゝだって三成君、あれから全然連絡してくれないじゃない」

「あのなあ！人の家の合鍵を、しかも黙って作るってなあゝはつきり言うが、ストーリーだかな！」

さんざんとお説教をしたあと、俺は愛姉の用件を聞くことにした。

「でゝわざわざ俺のところに来たその用件を聞こうか？」

「私達、今日からここに一緒に住むことになったから！」

ゝは？

今何と？？

「だから、私達は三成君の家に住むことになったの！」

「おいおい！義親父は！？」

「いいって！」

まじかよ！そんなことでいいのか、義親父！！
って言うか『私達』？

「待て、愛姉：『私達』って：他に誰が：」

「お姉ちゃん、お風呂あがったよ」

とパジャマ姿で、俺が冷蔵庫に入れていたジュースを片手に我が義妹の凛がいた
っていうか、こいつら人の物勝手に使いやがって。

「あっ兄さん、いたんだ」

「：いたら悪いか？」

「あっ：いえ、そういうことじゃなくて：」

「まあいいが：」

この二人に出会ったのは：：：たしか8年前か
最初は恥ずかしかった、あのころは：正直言って楽しかった、あの
日から俺は生まれ変わった：：：：だが

「ねえ！三成君、明日暇！？」

「明日は部活があるんだ」

「ええ！」

愛姉はガツクリと肩を落とす

「そ…そっか…」

愛姉は目をうるうるさせながら俺を見る

…これだあ、いっつもこうなんだ…お姉さんぶるのが好きで、なおかつ俺に甘える。

「しょうがないだろ？」

あいつらすぐサボるから（特に律が）

「じゃあさ、三成君の学校行っている？」

「ダメ」

即答で答えた。

「ええ〜！なんでえ〜！！」

「いや、なんでって…」

俺はただ律達に知られたくないだけだが…

「三成君…私のこと…嫌い？」

愛姉は涙目で俺を見る

「……………」

「うう……………」

「…わかったよ…来てもいいから、頼むからそんな目で俺を見ないでくれ…」

「やったあ……………!!」

毎回この笑顔に負ける…

結局、俺はまだまだ甘いんだろうなあ…

俺はそのあと、明日の部活のことを考えていた。

…次の日…

「へえ…、ここが三成君の学校かあ」

「……………はあ……………」

なんか、いざ部室に行くとなると行きたくなくなってきた、だがここまで来たらもう引き返せない。

ガチャ

「うい……………」

「おっ、やっと来たよ」

「みっくん！」

「だからみっくん言うな」

俺が部室に入ると愛姉が恥ずかしそうに部室に入る。

「お…おじゃまします…」

「あれ、そっちの人は？」

「ああ、こっちは俺の義理の姉の今田愛だ」

「ど…どうも…今田愛です」

愛姉はペコリとおじぎをする

「」「」「ど…どうも…」「」「」

5人もおじぎをする

「はぁ…今日は一段と忙しくなりそうだ」

燃え尽きないことを祈ろう。
まず…

「お前ら…またティータイムしてたのかよ…」

机にあったティーセットを見ながら言う。

「こ、これはあれだよ…！あ、あの…」

「言い訳にしか聞こえねえよ…」

俺は椅子に座り、兵法書をだして読みだす。

「三成先輩、いつも何を読んでるんですか？」

梓が俺の読んでいた本をのぞきながら言う。

ちなみに、俺が読んでいる兵法書は『孫子』だ。

「…何ですか…？『孫子』って…」

ちなみに、孫子のはあの風林火山などが書いてある兵法書である、もとは中国で生まれたのだが、日本で復元されたのを見ている。

「風林火山を知ってるか？」

「は、はい…聞いたことがあります」

「風林火山は、武田信玄が使っていた軍略法よ」

と紬が俺の分のコーヒーを持ってきてやってきた
こいつが風林火山をしているとは…さすがお嬢様だぜ。

「ああ、これはただの兵法書さ…」

「兵法書…ですか」

梓に兵法書をわたしてみた、するとむずかしそうな顔をしている
なんか梓の反応が面白くなってきた。

「わ、私にはさっぱり…」

梓は苦笑いをしながら兵法書を返してくる。

「ふふっ…」

紬と愛姉は面白かったのか、こっちをみながら暖かく微笑みを浮か
べる。

「三成君は本当に兵法書とか、軍略が好きだね」

「愛姉は知ってんだろうが、俺の取り柄は軍略と武術しかないのを」

ま、これも『クリーチャーハンター』としての務めだしな…っ
ていうか、ただ好きなのは事実だな。

「でも、何のために兵法書なんかみてるんだ？」

俺がコーヒーを一口飲むと滯が痛いところを突く。

「そ…それは…あ、あれだよ、脳トレだ！」

「の、脳トレ？」

「そうそう！これを見て脳を鍛えれば、学校の課題とか覚え
れるんだ！」

「な、なるほど…律と唯もやれば成績上がるんだろうなあ」

無理な気がする…
だって…

「私たちは、勉強が嫌いだ！」

とか言ってるんだもんよ。

まあ…予想は付いていたが。

♪♪

ふと会話が盛り上がっていた時、俺の携帯が鳴る

『神崎悟』

ピッ

「どうした?」

『み、みみみみ三成! 大変だ!』

「なにが?」

『それがな!...と、とにかく今から本部に来てくれ!』

ブチッ...プー...プー...

何なんだ?

とにかく、急ぎの用ができちゃったか...

「悪い、用事ができた...愛姉は先に帰っていてくれ!」
「え?! み、三成君!」

俺は、マッハの速さで学校を後にした。

6話「義姉弟は色々めんどい」(後書き)

三成は本部に戻るとあることを知る。「三成…な…なんだよ…これ」それは、人類の危機と呼べることだった。

次回 第7話「クリーチャー」

いざ、民のために…!

三成「…何これ…」

劉輝「見て分かんない? 次回予告だよ」

三成「って、こんなもん作んなああ!!」

バキッ!

劉輝「ギャアアアあ!!」

ドサッ…

劉輝「つ…次は…キャラ紹介だよ…み…三成たちのパラメーターも…あるよ…」

番外編「キャラ紹介その2」(前書き)

今回はサブキャラも紹介だよ。

三成のパラメーターも書きました。

番外編「キャラ紹介その2」

いまだみつなり
今田三成

(本名…石田三成)

武力…100／89

知力…100／95

桜が丘高校の2年生。

兵法と医療の知識を持っていて、その上武術が得意である。

さらに、人望が厚いため、色んな人に頼りにされてもいる。

学校ではファンクラブができているのだが、彼は女の子のアプローチに気がつかない鈍感でもある。

彼はあの石田三成の子孫で、彼は23代目の三成の血を受け継いだ子である。

さらに、三成はウィルスで作られたクリーチャーを倒す『クリーチャーハンター』でもある。

知力にうといので、学校では『現在の諸葛亮孔明』と言われている。クリーチャーハンターの人々には『軍神の子、三成』と言われている。

身長…175

体重…62

性格…時々毒舌、Sな面もあり、敵を作りやすいタイプ

成績…中の上(だいたい450点以上は取る)

得意武器…剣、槍、銃

楽器…ギター

好きな物…仲間、義、甘い物、絆

嫌いな物…外道、仲間を裏切ること、不義、クズ

セリフ

「お前が俺に勝てるとは思えんなあ」

「クズが…消してやろうか？」

「馬鹿は大人しくしろ」

「俺が守ってやろうか？」

「無様だ…」

「ふ…不義だ」

「来い…俺が守ってやる」

「俺は義のため、倒れん」

「大一大万大吉にかけて！」

神崎悟武力^{かんざきごうりき}100／82 知力100／56

三成と同じ『クリーチャーハンター』の一人。

中学の時は不良だったが、三成に会い、三成の大きな心に惚れ込み、三成の親にクリーチャーハンターにしてくれと言い、子飼いの将として活躍している

だが、学問に弱く、医療の知恵などはもっていない。
だが、戦いでは勇猛な活躍している。

身長…170

体重…68

性格…感情のまま動くところがある、そのため短気でもある。

得意武器…刀（二刀流）

好きな物…志、義、井ぶりもの

嫌いな物…信じない奴、学問、考えること。

セリフ

「っしゃあ！さすがは俺様だぜ！！」

「テメーは心がねーのか！」

「子飼いの将、神崎悟、いざ参る…ってか？」

「夜露死苦！」

松木レイ（まつきれい）

武力100／90 知力100／78

悟と同じ子飼いの将、彼は幼いころにクリーチャーに親を殺されており、他の子供にあんな思いをさせたくない思いでクリーチャーハンターになった。

三人の中では、武勇に優れており、医療の知識もある。

三成をライバルだと思っている。

身長…178

体重…65

性格…時々真面目なところがあり、冷静に状況を見る。

得意武器…長刀

好きな物…辛い物、武器の調整、鍛えること

嫌いな物…甘ったるい物、船

セリフ

「来いよ、俺らのところに」

「次は虎が噛みつくぜ…」

「大切な人も守れない奴なんかに義を語られたくないな」

「忠義を尽くせ」

いまだあい
今田愛

武力100／54 知力100／98

三成の義理の姉で、お姉さんぶるのが好きな人。

いつも三成のことを考えていて、三成によく甘える。

なお、彼女は『クリーチャーハンター』の医療チームのリーダーでもある。

職業は教師をしていて、色々な免許を持っている、その上料理、家事、仕事をそつなくこなすパーフェクトな人。
人を動かす統率力に長けている。

身長…156

体重…不明

性格…明るくていつも元気な性格で、周りに元気をくれる。

好きな物…義、お姉さんぶること、三成の手料理

嫌いな物…戦争、ホラー系、三成を傷付けること

セリフ

「三成君！一緒に行こう」

「ホ、ホラーはダメだよぉ」

いまだりん
今田凜

武力100／63

知力100／89

三成の義理の妹

ふだんは面倒くさがり屋なのだが、学校などでは猫化ぶりをしていて、文句も三成以外には言わない。

かと言いつ、甘えることもある。

『クリーチャーハンター』では愛と共に医療チームにいる。

身長…150

体重…不明

性格…学校では、いつも明るい、家では面倒くさがり屋。

好きな物…甘い物、あつたまる物。

嫌いな物…面倒事、細かい人。

セリフ

「私だって、やるときはやるんだから！」

「もう、全部兄さんが悪い！」

番外編「キャラ紹介その2」(後書き)

三成「また俺の紹介かよ…」

劉輝「そうだよ、今度はパラメーターがついてんだよ」

三成「面倒なことを…」

劉輝「次回はちっとヤバイ話です、お楽しみに」

7話「クリーチャー」(前書き)

今回は世界の危機の知らせです。

7話「クリーチャー」

ともかく走って本部に来たが…

「おい、そっちの処理は後だ！」

「この処理を頼む！」

「はい！！」

いきなり本部に入ると、皆あわてていた、

「おい、なんだよ…これ」

「み、三成か！今すぐに団長の所に行ってくれ！」

スタスタ

「お、おい！」

何なんだ？

ともかく、急ごうと思い、俺は団長室にいった。

「失礼する…」

「おお！来てくれたか…」

「何だよ、義親父」

俺の義親父は手に持っていた一枚の紙をわたしてきた。

「???」

「読んだらわかる…」

その内容はまさしく、俺達の…いや…人類の危機かもしれない。

（6時間後）

あれから、俺は本部でこの話を6時間もさせられた、しかも途中、義親父のどうでもいい武勇伝まで聞かされた…
おかげで腹減っちゃった。

「ただいま…」

「「「「「おかえり」」」」」

うん…?

嫌な予感しかしないのだが…

「おう、三成おそかったな！」

「おかえり、みつくん！」

律に唯…何してんだ？

「遅かったな」

「お茶いれましょうか？」

「先輩、おかえりなさいです」

……え…つと…何のドッキリなんだ？

「…お邪魔しました」

「あってるから！ここあなたの家だから！！」

俺はすぐに凜から事情を聞いた、なんでも愛姉が俺の料理の話をしてほしい、それで皆が『ぜひ食べたい！』と言いだしたため、愛姉が『じゃあ、今日食べにおいでよ！』と言い出した結果がこれらしい。

「…っていうか、俺が作る限定で…」

「いいじゃないですか」

凜は笑いながら言う。

「両手に花…いや、花畑状態かな？」

「はっ？」

凜が何を言っているかは意味不明だが…まあ、忙しいのでもいいか。
カレーでいいかな？
っと…その前に

「愛姉、ちょっと」「ん？なにに、三成君」
「これ、義親父から」

俺はポケットに入れていたあの紙を出した。

「こ、これ…」

「…俺達も、今まで以上に忙しくなるぞ…」

「そうだね…」

「…それじゃ、腹をすかしている動物共のためにメシを作るか…」

冷蔵庫の中何が入ってたっけ？

「三成いゝ早く作ってくれよお」

「お腹へったよ、みっくん！」

「わかったから騒ぐな、凜手伝え」

「ええゝかったるゝい」

「あの、私が手伝いましょうか？」

「紬はいい、凜手伝わないんなら、お前はメシ抜きだ！」

「わ、わかった！わかりました！」

レイ side

「…おい、起きろよ」

俺は居眠りしていた悟を起こそうとしているのだが…

「…へへっ…もう食えねえよ…」↑悟の寝言

とまあ、起きないんだよ。

しかも、寝言がワンパターンだぞ…

「いいから起きろ！！」

バキッ！ボキッ！バコッ！

「…ごめんなさい…」

よし…馬鹿も起きたし…

「おい、そろそろ作戦開始だ！」

「「おう!!」」

今、俺たちはアメリカのアーカンソン州にいた、本当なら、三成も来るはずだったのだが、あいつは学校があるからなあ。

俺と悟みたいに学校には行っていないからすぐに出撃できんだよ。

「で…今回の仕事ってなんだ？」

「お前、話聞いてた!？」

「い、いやああ…寝てた」

「一回しか言わないぞ…俺達はあ、突然大量に現れたクリーチャーを倒すっていう任務だ!」

なぜクリーチャーがいきなり、それも世界中に突如現れたのか…謎すぎる…

「おい、そろそろつくぞ」

「うっし!行くか!」

「行きますか!」

俺達は、それぞれの武器を手取る。

「これより、クリーチャー討伐作戦を開始する!!」

＼三成side＼

「「「「「「いただきま〜す」「」「」「」」

あれから、悩んで悩んだ結果、けっきょくカレーにした、もちろん、甘口のカレーだ。

「ッ！！お…おいしい」

「たしかに…」

「みっくんは料理の天才！」

「本当だわ〜」

な…なんだ、その泣きそうな顔は…

「うんうん！やっぱり三成君は料理が上手だね」

「そうか？一人暮らししてたらこんなの普通だと思うが…」

「いや！三ツ星も付くぐらいの美味さだ！」

「そ、そうか？」

ここまで喜ばれるとなんか…照れてしまう…

「あ〜みっくん照れてる〜」

「て、照れてなどいないっ！」

「真っ赤ですよ」

「て、照れてなどいないっ！だんじて！」

「三成は照れ屋だなあ」

「照れ屋です」

ぬうう：

俺は：俺は：

「：不義だ：」

「またそれですか：」

口をはさんでくんな：凜

そのあと、俺達は食事を終わらせ、俺は唯達を送ることにした。

「ここでいいよ」

「そうか：んじゃあ、また学校で：」

「」「」「また学校で！」「」「」

こんな生活が：いつまで続くか：俺の頑張りしだい：か。

だが、俺は絶対に守る：命にかえても：

俺は、夜空を見ながら歩きだした。

ドン！

「うん？」

…さっそく仕事か。

俺の目の前には、巨大な斧を持ったクリーチャーがある。

「フン、最近腕がなまっててなあ」

『ぐぐぐぐ…』

やる気満々だな…

俺はかついでいたギターケースを開けて剣を出す。

「よし…上等！」

『グワアアアー!!』

クリーチャーが斧を振り下ろしてきたが、すばやく避けて縦に一刀両断した。

溶けていくクリーチャーを見ながら剣をしまう。

「フン…見かけだましかよ…」

7話「クリーチャー」 (後書き)

次回は三成のピンチ！
お楽しみ！

8話「折れない決意」(前書き)

今回は梓視点です。

ついに三成の正体がバレル！？

8話「折れない決意」

三成 side

あれから、2ヶ月たった。

あいかわらずクリーチャーは増え続ける一方だ

今では、政府も立ち上がる始末、いずれは市民にも耳が入るであろう。

もう、夏か……

「ということだ」

『こちら長い戦いのせいで死亡数が48人だ』

「こっちは戦いはおこってはないが、クリーチャーの数は増えている」

『まあ、俺達は全力で戦うだけだ』

「フン…じゃあ、健闘を祈る」

ガチャ…プー…プー…

いつまでもこの生活もままならんな。

俺は散歩がてら外に出る。

「クリーチャーが出てこないのを祈ろう…」

念のためにギターケース（中には剣が入っている）を持って行っている

「……あつ…そういえば、食パンとかないんだった」

ちかくに、スーパーを見つけて中に入る。

（20分後）

ったく……何で夜のスーパーはこう人が多いのかねえ。

「……チツ…もう9時じゃねえか」

携帯画面の時計を確認する
さっさと帰ろう。

「きゃあああああ！！」

「！！」

な、何だ！？クリーチャーか！！？
さっきの声の元へ行く

この先を右へまがると、俺の知っている人物がいた

「あ、梓!？」

く梓sideく

私は大きな声の元に行くと、そこには人間でも動物でもない物が人を襲っていた

私は怪物と目を合わせてしまい動けずにいた

「あ……ああ……」

「梓!!!」

ふと横を見ると三成先輩がいた。

「み、三成先輩……」

「梓!そこら離れろ!!」

「そ、そう言われても……」

あ……足が……動かない

「クソッ!」

三成先輩は、いきなりギターバックから鋭い刃をした剣を出してきた。

それと同時に怪物が襲ってきた

「海劉斬！」

三成先輩は、いつのまにか私の目の前におり、そのまま怪物を切り捨てた。

「おいッ！隠れていないで出てこいよ、このクズ野郎が！！」

「……チッ！ばれてたのかよ、だがここで捕まるわけにはいかんでな」

「逃げる気か！」

「次に会うのは、戦場だ…じゃあな、石田三成」

（10分後）

私は三成先輩の真実、そして今、世界の危機を覚えてもらった。

「…つまり、三成先輩はさっきの怪物を倒す人なんですね」

「ああ…そして、世界は今…いや…人類は今、危機を迎えているんだ、次々とあらわれる

クリーチャー達その数、全世界合わせて300万だったかな？」

「でも、何で三成先輩はあんな怪物と戦っているんですか？」「全

ては義のためだ…」

「義のためって……それだけですか？ 守りたい人とか、守る物はな
いんですか？」

「……」

私の言葉に三成先輩は黙って下を向く。

「俺は…なにも…！」

何かを言いかけた三成先輩は突然立ち上がり、剣と取り出した。

「お前はもう帰れ…」

「え…？」

三成先輩が見ているところを見ると、そこにはさっき倒した怪物
がまだいた、しかも次は数が増えていた。

「み、三成先輩……う、後ろにも…」

「チッ…囲まれたか…ここまできたとは…計算外だ」

三成先輩は剣を構える。

「チェストオオオ!!」
「「!!?」」

いきなり、怪物の方から叫び声が聞こえると
ドン!!

と地震が起きる、そして、怪物がいた一部が吹き飛んで行った。

「三成!こっちだ!!」

そこにいたのは、普通の人間の人であった
手には大きいハンマーを持っているおじさんがいた。

「三山さんか!」

「おう!いいから早く来い!」

「はい!梓、走れ!!」「はい!」

私と三成先輩は全力で走る。

「三成!後ろだ!!」

三成先輩は後ろを向くと、剣を横に切りだす
ジュバツ!
という音がして、血が飛び散る。

私はその血を見ると、足を止まりそうになる。

「早く！」

そこに、三成先輩が私の手を引っ張ってくれる。

「三成！チームの奴らが来るのを待つしかない、ワシが奴らを食い止める、お前はその子をたのむぞ！」

「わかりました、ご武運を！」

「あ、ありがとうございます！」

私と三成先輩は一礼してその場を去った。

「さあゝてゝ来い！この三山一郎は、そう簡単には倒れんぞ！！！」

＼三成side＼

俺達は、なんとかその場を抜け出せたが……

「何で……何でクリーチャーがこんなにいるんだー！！！！」

俺は一匹を切り捨てて叫ぶ。

だが、おかしかった
なぜなら、クリーチャーは人が通るようなところには、あまりうろつ
かないからだ。

「くそっ！ いったいどこからあふれ出すんだ、この雑魚どもは」
「三成先輩！ 後ろからも来てます」

このままでは、サンドイッチのハムだ。俺は頭をかかえて考える。

「なにか… なにかないか…」
「先輩いい〜！」

梓が涙目で俺の血の付いた服の裾を掴みだす。
何か… そう… こうなったら爆弾で下の地面に穴でも……… 穴？
下と言え… 下水道… 穴と言え… マンホールだ！
近くにあるマンホールを見る。

「梓！ 下水道に行くぞ！」
「えっ！？」

マンホールを開けて梓をかかえる

「えっ！？ ち、ちょっと！！？」

「我慢しろ！飛び降りるぞ！」

マンホールは、なぜか口が大きかったので、二人まとめて降りることにした。

「はい、ジャンプー！」

「きゃあああ！！！！」

〓10分後〓

あれから歩きだしてから10分、出口はいっそうに見当たらない、梓は怒っているのか、まったく話もしない

まあ、当たり前かもしれない

こんな騒動に巻き込んでしまった上に、命を落とすかもしなかったんだからなあ…

「……怒ってんのか？」

「えっ……？」

「こんな騒動に巻き込んだんだもん…すまん…」

「い、いえ！そうじゃなくって……ただ」

「……？」

「三成先輩はいろんなことをかかえて悩んでいたんだって……」

「……同情してくれるのか？」

「……」

「俺は好きでやってんだ、同情なんて必要ないぞ…俺は好きでこの

仕事も、軽音部もしてんだ」

「三成先輩…」

「この今田三成、そう簡単には折れんよ」

そう言うとき梓は微笑んだ。

これは、俺の強がりでもあるのだろう。

「まあ、もし俺が立ち直れなかった時は…頼むよ」

今の俺はたぶん顔が赤いだろう。

ここだけの話、自分で言ってる恥ずかしかった。

（20分後）

そのあと俺達は出口を見つけた。俺はマンホールを開けて周りを見る。

どうやらクリーチャーはいないようだった。

「よつと」

ひょいっと外に出て梓に手を差し出す。

「ほれ…」

「ありがとうございます」

「あゝあ、結構離れたところから出てきたんだなあ」

「どうするんですか？」

「……しかたねえ、俺の馴染みの店に行こう」

「どこですか？」

「すぐ目の前」

俺のすぐそばにあった店を指差した。

「近っ!!」

「さてさて、入ろうかー」

「無視ですかっ!？」

梓は俺の後を追うように店に入って行った。

く梓sideく

お店の中は何やら魚の臭いがただよっていた。

「いらっしやい…って!ダンナかい!」

「よう、信次どうだ? 商売の方は」

「まあ、ぼちぼちってところですよ」

「紹介しよう、水木^{みずきしんじ}信次だ」

「どうも、お嬢さん」

「どうも、中野梓です」

私と三成先輩は椅子に座り、水木さんにさっきまでの出来事を全部言った。

「そうだったのか：梓ちゃんも苦勞したろう」

「全ては俺の責任だ」

「そんな：！三成先輩のせいじゃありません！」

「そう言ってもらうと気が楽になる」

「よし！ここは俺の料理で元氣になってもらいましょう！」

水木さんは立ち上がり、魚を取り出した。

「：いいのか？俺達今金持ってねえぞ？」

「安心なさいや、ここは俺のオゴリでさあ」

「「マジですか！！？」」

私たちは思わず叫んでしまった。

「さすが日本一の寿司職人だ」

「へえ！水木さんて寿司職人なんだ」

「ああ、腕はすごいんだが…」

その時、三成先輩の顔は青ざめていき、汗まで出していた。
私は水木さんのほうを向くと水木さんは小刀で魚をさばっていた。

「ヒッ！！」

「いつも愛用のドスで魚をさばくんだよ…」

「な、何でドスなんですか？」

「それはこいつが元極道だからだ…」

えっ…？

「ええー！ー！！？」

「懐かしいですねえ…あの時のこと…」

「ああ…懐かしいなあ…あのころが」

8話「折れない決意」(後書き)

今回もグダグダになってしまいましたがしかたないか…
さて！次回は水木と三成の過去です、お楽しみに！！！！

9話「過去」(前書き)

今回もうグダグダです
それではどうぞ！

9話「過去」

それは、三成と信次がまだ出会う前だった。
三成と信次が出会ったのは1年前だった。

「オラッ！ さっさと弁当買ってこんかい！！」

ボタン！

と片手にお金を握りしめながら部屋から蹴り出される信次。

「クソッ！」

このころの信次は極道と言ってもパシリや、雑用などを押し付けられる毎日だった。

なにかと上司はミスを彼に押し付け、「弁当買ってこい！」と押し付ける。

だが、信次はどれだけ苦しくても、どれだけ泥にまみれようとも、極道を続けた。

そこが、今の自分の居場所だから。

「…あきらめんど…必ず極道界のトップに立ってやる…！」

「チッ…くっそ…田井中め…うん？」

「うん…？」

そこに現れた三成と信次は出会った。

「……」

「……」

「…何だよ…」

「アア？」

「俺の顔に何かついてんのか？」

「…いや、別に」

「だったら人の顔をマジマジと見るのはやめてくれ、不快だ」

「それどういう意味だ？アア！？」

「言葉の通りだ」

「テメエ！！ツラかせやコラア！！！！」

信次は三成の服を掴む。

「触んな…」

「アア！！？」

「触るなっつたんだよ！！」

三成はそのまま信次の服を掴んで投げ飛ばした。

「ぐわっ！」

「フン…貴様の様な者が、俺に勝てるか？」

「くっそ…！」

信次は立ち上がり小さなナイフを出し横に切り上げる。

「うわっ！」

なんとかギリギリのところで避ける三成

「危ねえだろうが！殺す気か！？」

「うっせえ！喧嘩っつーもんは『殺し合い』だろうがあー！！」

信次はナイフを三成に向けて振り回す。

「クズがっ！こんな街中で…ナイフなんて振り回すんじゃないやねえ！！」

三成は信次のナイフを持っていた片手を蹴りあげナイフを飛ばす。

「あっ…！しまっ…」

「そらっ…！！」

「ぐはっ…！！」

三成はそのままゆるんだ信次の顔に痛恨の一撃の拳を浴びせた。
信次はそのまま尻もちをつく。

「あつぶねえ…」

ナイフで少し切れた服をパンパンはたきながら言う。

「さてっ！オイッ！お前！！」

と信次に声をかける。

「…なんだよ」

「お前、極道か？」

「…ああ」「極道なんてやめちまえ…」

三成は財布から10万ほどの札束を信次の頭にのせてさっていった。

「……………クソッ！」

信次はその札束を握りしめ逃げるように行ってしまった。

|| || || || || || || || || ||

「そのあとどうなったんですか？」

梓は続きを聞いたそうに言う。

「ああ、そのあとにこいつ（信次）が極道をやめたんだ」
「何ですか？」

「たしか……なんだったっけ？」

「俺は、あるとき三成のダンナに惚れたんですよ!!」

信次が目を光らせながら言う。

「そ、そうだったんですか？」

「信次…まさか『こっち』系なのか？」

「ちがいますっ!! 俺は女の子が好きっス!!」

「（誤解を招きそうだ…）」

|| || || || || || || || || ||

「信次い…テメェ…極道やめるらしいなあ…」

「……………」

「しかも携帯で何が『チームを外させてください』だコラァァ!!」
メールで済む話じゃねーだろうが!!」

「それは…後でしっかりケジメ付けるつもりで…!」

「いや、お前はそのまま逃げる気だったんだろが」

「ふざけんじゃねー!!!」

極道の一人が持っていたバットが信次に向って振り下ろす。
ガシッ!

極道の腕が何者かに受け止められる。

「なっ…何だデメエ!!!」

信次は下ろしていた頭を上げると、そこには極道の腕を受け止めていた三成がいた。

「……………」

極道の一人は三成の手を振りほどき一步後ろに下がる。

「俺は信次こいつのダチだ…ダチを助けるのは当たり前だ」

「うっせ!!! お前なんかには関係ねえ! うせろ!!!」

「だったらお前らの事情なんか俺には関係ない」

「コノ野郎!!! いちいち口ごたえしやがって…!!!」

「フン…弱い犬ほどよく吠えるなあ…クズが」 「んだとお! なめとんのかこのクソガキイ!!!」

次々と武器を出してくる。

「覚悟しいやー！このクソガキ！！」

グサツ！！

＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝

「えっ！続きは！？」

「いや、わかるだろ？そのあとそいつらボコボコにして、組長さんに土下座させた。」

「あの時のダンナ、カッコよかったっス！」

「そりゃどうも」

三成はダルそうに茶をすする。

「あっ！そうだ…信次」

「はい？」

「例の物を出してくれ」

「えっ！またですか？まあいいですけど」

「（いいんだ…）」

信次は目の前のレジにパスワードを打つと、信次の後の壁から大量

の剣、銃などの武器が現れた。

「……」

梓はぼう然としている。

「あゝこれこれ」

「買うんスか？」

「ああ、義親父に頼まれて、ハンドガン三丁と、あと弾を百箱ぐらい」

「親っさんも好きだなあ」

「一方その頃」

「クソッ！どうにかできんのですか！？」

「このままじゃ、クリーチャーに我々人類は皆殺しにされます！！」

「わかっている！……今さっき大統領に連絡した……これより日本は他国と協力し、クリーチャーと全面戦争を行う！！！」

今、世界は大きく乱れだす。

そして、平和な日々はなくなる。

9話「過去」(後書き)

〽次回〽

市民はクリーチャーの存在を知り混乱する、そして。学校の皆と三成に亀裂が走る。

第10話「開戦前」

次回からはsideを使うのをやめます。なんかこっちの方が使いやすいかったから。

それではみなさんまた次回!!

11話「開戦前」(前書き)

今回もグダグダです！
それではどうぞ！！！！

11話「開戦前」

梓に三成の正体がバレて一週間たった。

〓7月4日〓

クリーチャー、アメリカに出現、開戦する。

〓7月5日〓

クリーチャー、ロシアに出現、開戦する。

〓7月6日〓

全国は国同士の争いをやめて和平、世界同盟が結成。

〓7月7日〓

全国の兵達が集結、全国訓練を行う。

〓7月8日〓

シンガポールでクリーチャー、出現、開戦。

〱7月9日〱

シンガポール、圧倒的な戦力に敗北、兵達は日本に退却する。

〱7月10日〱

兵力不足により、徴兵を市民に知らせ、希望する市民を兵士にする。

そして、7月11日の昼、桜が丘高等学校、クリーチャーの襲撃にあい、今田三成、奮戦。

〱7月11日〱

「おいおい、どうなってんだよ！」

「なに？あの兵士さんたち！？」

校門からトラックが入ってきて、中からシンガポールの残存兵士が下りてくる。

「シンガポールが負けたっていうのは本物だったのか…」

三成が新聞片手に一人で呟く。

「計算外だ…シンガポールが負けたことにより、士気が落ちただろう…となると…」

とぶつぶつと独り言を言いながら、机に広げたノートにペンを走らせ、今後の方針を書いていく。

「おいっ！見ろ！！」

一人の男子学生が校門に指差しながら叫ぶ。

「何かいるぞ！！」

シンガポールの兵士達は校門に向けて銃を構える。

「なんだ！？」

校門から、何やらたくさんの獣の手が現れる。

「なんだあれは！」

現れたのは、人型の獣であった。
獣達は日本刀のような長い刃物を持っていた。

「撃て！撃て！！」

兵士達は一斉に銃を打ち出す。
だが獣達は突進をしてくる。

「ギャアアア！！！！」

一人が切られる。

「来るんじゃねえ！！！！」

残りの兵士は必死に銃を撃ち続けるが、
わずか2分で、兵士達は取
り囲まれてしまった。

「ひっ……！ギャアアア！！！！！！」

辺りに血しぶきが飛ぶ。

「な…なんだよ…これ！」

「ったく、しょうがねえなあ」

三成がいきなり、ギターバックを背よい、窓から外に出ていく。

「おい、あれ今田じゃないか？」

「本当だ!!」

「何やってんだ!! 早く戻れ！」

だが、三成は戻ろうとしない。

「ったく、やってくれたぜ…まったく…また命が散っていった…」

三成は背よっていたギターバックを開ける。

「さあ…お仕置きの間だ!!」

三成はすばやく剣を取り出し、かつすばやく敵のふところに飛び込み、斬りかかった。

一人にかかわらず、三成は一騎当千の如く敵を次々と斬り倒していく。獣達は三成の攻撃を止められずにいた。

「す…すごい…！」

クラスの中にいた滯も驚きを隠せなかった。

三成の剣術もあるが、一番の驚きは三成の姿であった。

軽音部では見たことがない勇猛さ、そして、戦う姿、クラスの皆が思っているであろう『あれは、本当に今田三成なのか？』と。

「消えろ…！」

三成の服はみるみると血に染まっていく。その姿は、まさしく鬼神である。その姿は、まさしく鬼神である。

その姿は、まさしく鬼神である。獣の攻撃をひらひらと避けて攻撃、敵の武器を手に取り、利用して攻撃する。

だが、数は当然三成が不利、獣の数は減っていると言うより増えている。

「ちっ…！数が減らねえ、ここをパーティー会場だと思ってるだろう！」

「「言ってる場合か…！！」」

学校の生徒達が三成にツッコミを入れる。

三成は「ちっ…んだよ…」とぶつぶつと言いながら剣を構える。

「とにかくにも！数が多いすぎる！！」

三成は剣を投げ、敵の体に刺し貫く。

「奥義！飛竜蛇光斬！！」

剣を刺したクリーチャーに間合いを一気に詰めて剣を掴み、そのまま切り上げて次に斬りつける。

『ぐるるる！！』

クリーチャー達は三成に刃を向け続ける。

「死にたい奴から来い！！」

『ふっ…人間がよく頑張る…』

「え…！！？」

『ふっ…クリーチャーがしゃべるのがそんなに珍しいのか？』

三成はしゃべるクリーチャーにぼう然としていた。

「なんでだ！なんでお前がしゃべれんだ！」

『あたりまえであろう：我らは元は『人間』だったのだから』

そのとき、学校の後ろに雷が落ちた。

「そんな馬鹿な！！だって、クリーチャーはミトコンドリアウイルスに感染するのは人間以外…」

『生きていなければ、な…』

「なに…！」

『死んでいれば細胞も停止してるから感染するにきまってるだろうが…』

「どういう…！そうか！」

「「「どういうこと？」」」

「なるほど、そういうことか…！！」

「「「だから、どういうこと？」」」

「くっ！そういう仮説があったとは…！！……フグッ…！？」

三成の後頭部に激痛が走る。

後ろで生徒達が色々堅い物を投げていた。

「だからどうということなんだ…！」

「さっきからもったいぶって…！」

「さっさと言いなさいよ…！」

「いたたた！待て…！！後で教える…！！」

三成は若干涙目で言う。

「はっはっは!!何をやっている!三成!!」

「こ…このウザイ声は…!!」

「おい!ウザイとはなんだあ!!!!」

学校の屋上を見てみると、そこには特殊部隊の面々と悟、レイがいた。

皆は下りて来て、武器を構える。

「よゝ三成!苦戦か?」

「フン…余計なことを」

「まあまあ、では!」

「合図、よろしく願います、軍師様!」

「フン…全軍、突撃せよ!!!」

「「おう!!!」」

「レイは左に回り攻撃!悟は右に回り攻撃!!残りは俺に続け!!」

「「おうよ!!」」

そして、30分後クリーチャーを撃破することに成功した。

辺りはクリーチャーの死体と血で染まっていた。

三成は剣を収め、辺りの怪我人を運ぶ。

レイは学校内の生徒達に状況を説明させる。

悟は…校内の女子達をナンパをするが、相手にされなかった。

「みいいううなあありいい〜!!」

三成に掴みかかってくる悟。

「な、なんだ!!? 何をするんだ悟!」

「なんだよ!! 『三成ファンクラブ』 ってよお!!!!」
「知るか!!」

三成は悟を投げ飛ばし、木に直撃させる。

「ゴフッ!!」

「フン!! お前はそこで寝てろ! クズが」

そう言い捨てると、三成はどっかに行ってしまった。
悟は、そのまま木にめり込んでいた。

（30分後）

「まったく……悟の奴め」

まだ辺りは消えてないクリーチャーがいっぱいた。

（『我々は元は人間だった』）

三成の頭の中には、先の戦いでのしゃべるクリーチャーの言っていた言葉だった。

「（あのクリーチャー…元は人間だったのに、なんでウィルスに縛られてんだ？また生きれるんなら森とかで人間に見つからないようにひっそり暮せばよかったのに…）」

三成の頭の中はもうそのことばっかである。

「みっくん!!」

「うん？」

三成の前に唯をはじめとする軽音部が集まっていた。
だが、あんなことがあったからか三成は一瞬みんなから目をそらした。

「よ、よう……」

「どうしたんだ？」

「なんでもねえ…」

「ならなんで目をそらす」

滯が強引に三成の顔をみんなの方に向かす。

「……………」

「何か答えろよ……………」

「…………今の俺に答える義理もないんだよ……………」

三成は滯の手を振りほどき、その場を去っていく。
その三成の背中中、何やら寂しげにも見えた。

「三成……………」

「みっくん……………」

「今はそっとしておきましょう…………きっと何かあったのよ……………」

「ああ、たしかにな……………」

そこにレイが現れる。

「あ……………あなたは……………」

「俺はレイって言うんだ。それはそうと、あいつはお前たちにウソ
をついていたことを思ってたんだよ……………」

「そんなこと、気にしてないのに……………」

「あいつは気にしてしまうタイプなんだよ……………そう昔からそうだ……………」
「昔から……………」

「そう……………昔からだよ……………」

ドカーン……………!!

いきなり校門近くで爆発がおきる。

「なんだ！！？」

レイも何のことかわからずにいる。
みんなはすぐに爆発した校門に向かって走る。

「なんだ！？なにが起きた！！？」

一歩先に来ていた三成が他の兵士から聞いていた。

「わかりません！校門前に止めていたトラックがいきなり…」
「テロか何かか？」

「いや、ここの警備は堅くしてあったはずだ！」
「…うん！？」

三成は爆発したトラックのとなりのトラックを見る。
となりのトラックはなぜか燃料がもれている。

「！！みんなここから離れろ！！」
「「えっ！？」」

「燃料が漏れてる！爆発するぞ！！」
「「なにいい！！？」」

「逃げろ！逃げるんだ！」

みんなは一目散に逃げる。

「キャッ!!」

「なにっ!？」

逃げる途中に梓がこける。

「梓!!」

「あずにゃん!!」

三成は梓の元に全力疾走する。

「梓! 立てるか!？」

「は…はい!」

「よし! 走れ!!」

梓は三成に背中を押され走る。

「三成い!! 後ろ!!」

「えっ?」

11話「開戦前」(後書き)

～次回～

トラックの爆破に巻き込まれた三成、梓は自分のせいと思いこみどこかへ行ってしまふ。

レイはクリーチャーの巣まう商店街に出陣する。

12話「出陣!」

いざいかん! 義のために!!

12話「出陣!」(前書き)

今日は新キャラ登場!

(龍が如く…面白いなあ…)

それでは、スタート!!

12話「出陣！」

爆破があつてから、12時間以上たった。

三成は保健室で応急処置をしていた。

外では、三成を信頼していた人からいろんな人が待っていた。

「……三成……」

「……三成先輩……」

「クソッ！ いったい誰が…！ トラックの爆破といい、警備は堅くしていたはずだろう！」

「……」

悟は怒りを隠しきれず拳を壁に叩きつける。

レイは拳をギュッと握りしめる。

ガチャと保健室の扉が開くと、中から凜があらわれる。

「凜ちゃん！」

「「三成は！？」」

「みっくんは！？」

「大丈夫です、なんとか命に別状はありません」

「「はあ……」」

「ただ…軽い火傷で済んだのですが、爆風で吹き飛ばされた時に大きなダメージを負ってしまったようで…あばら骨も何本かひびが入って…」 「動けそうにないのか？」

「はい…2週間は…」

レイは「そうか…」と言いながら頭をかかえる。

「ま、まあ三成が無事でよかった」

「だが、今後の方針には影響大だな」

「……ごめんなさい…」

梓はポツリとレイに向かって言う。

「そ、そんな、梓ちゃんのせいじゃないぜ！な、なあ悟！」

「お、おう！」

「そんなことはありません！私のせいで三成先輩がこんなことに…！」

「梓ちゃん…」

「私…三成先輩に合わせる顔がありません！」

梓は目に涙をうかべ、その場を走りだした。

「あずにゃん！」

「「「梓【ちゃん】！！」」」

「しょうがねえ！俺が後を追うからここは任せた！」

レイは置いていた自分の装備品を装着させ、外へ飛び出した。

（2時間後）

「ハア…ハア…」

『グルル…!』

辺りは獣の音がただよい、人間の死体が散乱している。

「ハア…ハア…」

そんな中、梓は一人でいた。

カツカツとレイは足音を立てながら歩く。

音につられたのか、クリーチャー達が群がってきた。

「チッ!もうこんなにまでいるのか…」

レイは背中にかかえていた銃を構える。

「悪いがこっちも急いでんだ!邪魔すんなああー!!」

レイは意を決して突撃する。

二日後

「う…うん？」

三成はゆっくりと目を開ける。

「ここ…は？」

「三成！？」

三成に気づいた滯が言う。

「えっ！？ ホント！？」

つづいて律が。

「…よう…皆、久しいな…」

「ひ、久しい？？」

「ああ…滯、唯、律、紬、すまなかった…心配をかけた…」

「どうやら、一時的な記憶障害かと」

三成の顔は何だかほのやかであったため、みんなは何となく気味が悪いと思った。

「梓…まだ戻らないのかなあ…」

「梓？そっかあ…ここにはいないのか…梓？……………っ！」

いきなり三成の顔は真剣な物になった。

「ど、どうした？」

その時、三成はガバツ！と飛び起きる。

「律！！今何日だ！あれからどれくらいたった！！？」

「えっ！？きよ、今日は7月13日だ…」

「13日！？じゃあもう…こうしちゃいらんね…うっ！？」

飛び起きようとしたとき、三成は体を押さえて痛がる。

「む、無茶よ！」

「く…」

「く？」

「食い物持ってきてくれ……！」

「何の！？？」

「なんでもいい、カルシウムと血が足りん…！ジャンジャン持ってこい！」

唯達は急いで食堂から色々食べ物を持って三成にわたしていく。
だが、三成は何だかやけ食いをしているようにも見えた。

「なあ、いくらなんでも食べすぎ…」

「うるへー！！三日メシ食ってねえなら魚10本だってんだ！」

三成は食事を再開させ、食べ物を口の中にかっ込む。

「よう、みっちゃん」

そこに一人の男があらわれた。

男はヤクザみたいな身なりをしており、口にはタバコ、手にはビニール袋いっぱい酒、ジュースがあった。

「ちょっと！桜井さん！？ここ禁煙ですよ！」

「まあまあ、かたいこと言いなさんな、凜ちゃん」

桜井という男はポンポンと凜の頭をなでるとやけ食いをしている三成に近づく。

「よう、みっちゃん久しぶりじゃないの？」

「ん？何だ一樹、笑いに来たのか？なら帰れ」

「久しぶりに会ったのに冷たいのね」
「フン……」

三成は手を止めて話をし出す。

「とりあえず、話は聞こう…」
「そりゃどうも」

一樹はタバコを消して、真剣な顔をする。

「お前さんこの学校の生徒だよなあ？」
「あ？ ああ…そうだが、それがどうした」
「さっきここに来る前に女の子がいてなあ、何か泣いていたが…」
「「「えっ！！？」」」
「見たところ、桜が丘高校の制服だった」
「それ、いつの話だ？」
「二日前だ」

その時、三成の脳裏に浮かんだのは梓だった。

「特徴は！？」

三成は桜井の肩に手を置き、問い詰める。

「え、えっとたしか…背が少し小さくて…黒髪で…あっ！あとツインテールだったぞ」

「なっ!？」

「「「ええ!!!?」」」

「梓…!」

三成は飛び起きて、自分の制服を着だす。

「ちょっと!何してるんですか!？」

「決まっている…!梓を助けに行く!」

「でもその体じゃあ…!」

「元々俺がこんなことになったせいで、あいつは自分のせいと認めてしまった。

責任は俺にある」

カチッと剣のベルトを背中に指してブレザーをはおる。

「さてよ」

一樹は三成の肩を引っ張る。

三成は一樹の方を向いて睨む。

「何だ?止めようってか?」

「そう睨むな、今行っちゃって間に合わん」
「どういことだ？」

それは、数時間前のことだ。

クリーチャーは商店街で大暴れ、連合軍は1万の兵を商店街に出撃させる。

そして、両軍が戦っている間に街を封鎖するという作戦である。
つまり、その1万の兵士はただの使い捨ての駒として使われ、街が封鎖されるとただ殺されるだけなのである。

「そ、そんな…！」

「ひどすぎる…！」

「そうだ！」

「人の命を駒扱いなんて！」

「そして、その街の閉鎖される時間は…14日の朝6時」

時計を見るともう0時を回っていた。

いくら三成でも巨大な商店街を6時間以内に見つけるのは不可能だ
あった。

「……クソッ…！」

三成は近くにあった椅子を蹴り飛ばす。

「梓ちゃん…」

「レイ…梓…」

シン…としたみんなに口を開く一樹。

「ああ、俺は仕事に行くわ…って携帯が鳴ってな…あ…もしもし、ええ、今日の仕事キャンセルだって、俺今日暇になんじゃ…ん…わかった、じゃあ、人助けでもしますか…（棒読み）」

そう言いながら一樹は自分の車のカギを三成にちらつかせる。

「…お前…」

三成は一樹に視線を向ける。

「おっと！俺の分の銃も忘れずに持ってこいよ」三成

「あ、ああ」

三成は何も言わずにできるだけ持てるだけの武器を一樹の車に乗せていく。

「よっと、こんなもんか？」

「ああ、さ！あまり時間がない、行くぞ」
「「「ちよっと待って！！」」」

二人の前にやってきたのは、唯、漣、律、紬、凜、悟の六人がいた。

「「……………」」

「「「……………」」」

「一樹、行こう」

「ああ…」

と二人はみんなを無視して車にのる。

一樹の無視してエンジンをかける。

「「「話くらい聞いてくれませんか！！？」」」

「で？なんだよ、そんな大きな荷物を背よって」「私たちも行きた
いんです！」

「ダメだ」

「どうしてだよ！お願いだよ！」

「律、これはゲームではないんだ。」

本物の命の取り合いの戦いだ。

お前は、その恐怖と闘えるのか？

命の重さに耐えられるか？

クリーチャーと言っても、あいつらも元は動物、人間、すなわち命
を取るということになるんだ」

「そ、それは…」

「しかし！…………それに耐えられるのなら、ついてこい」

三成は最後にそう言い、車に乗り出す。

「さってと、じゃあ、いきますか」

「「は…はい!!」」

「やれやれだぜ…」

街が封鎖されるまで、あと5時間

12話「出陣！」（後書き）

新キャラどうでした？自分ではいい感じで作ったのですが…
では！次回はキャラ紹介です！

番外編「キャラ紹介その3」 (前書き)

目が痛いんです。

関係ないけどスタート！

番外編「キャラ紹介その3」

桜井一樹 さくらいかずき

武力..100／80 知力..100／81

誰にでもお金を貸す金貸しや。

元はホームレスだったのだが、三成の義理の父親、今田信也に知り合い、生き方を変えた。

現在はスカイヒューチャーという金貸し会社の社長である。

金貸しの仕事とはゆえ、危険な仕事もしているらしく、それなりに力もある。

イメージは龍が如くの秋山駿

身長..180

体重..67

性格..甘い、軽い、だが、怒るときは怒る

得意武器..なんでも使える

好きな物..酒、人、今田一家

嫌いな物..金にたかる人間、外道

セリフ

「いやゝおつかれさん」

「みっちゃんにたのもう…」

「外道は泥沼にでも寝てろ…」

「悪いが、金金言ってるやつには金は貸さねえ」

いまだしんや
今田信也

武力…100／91 知力…100／89

三成の義理の父親

人一倍に正義感が強く、誰にでも信頼されている。

三成のことを我が子のように育てて、自分が学んだ知識を全て三成に教えた。

現在クリーチャーハンターの隊長として活躍している。

イメージは龍が如くの風間新太郎

身長…183

体重…74

性格…調子に乗りやすい

得意武器…なんでも

好きな物…平和、家族、子供たち

嫌いな物…無駄な争い

セリフ

「無駄な戦いは避けたい」

「聞いてくれ！俺の武勇伝！！」

「お前らは若い…もっと世界を見ろ！」

「全軍突撃！！！」

みやまいちろう

三山一郎

武力…100／97

知力…100／70

三成の上司。

誰にでもやさしい性格で、頼りにされる兄貴肌。

クリーチャーハンターの中ではトップクラスの力を持っている。

身長…190

体重…79

性格…誰にでも優しい

得意武器…巨大ハンマー

好きな物…演歌、猫、家族

嫌いな物…無駄な争い、悲しみ、

セリフ

「戦は華がなければなあ」

「わしは博打が嫌いだ」

「チェストオォー!!!」

番外編「キャラ紹介その3」(後書き)

今度家の関係でパソコンを切らなければいけないようです。
その場合、登録物が全部消えるかもしれないので、次回は「けいおん!」義の心と愛する馬鹿たち」2」で始めるかもしれません。
ホントすいません!

13話「戦場」(前書き)

三成はどうなる!?

そして梓は!?

ではどうぞ!!

13話「戦場」

「よし！準備はいいか！？」

「ああ」

「いつでも！」

カチッ！

銃を腰のホルターに入れて、両手に二丁の銃を持つ。

「では、いざ出陣だ！」

一樹は一気にアクセルを踏む。

「うおっ！？」

車はすごいスピードで商店街に突っ込む。

「前方、クリーチャーが出現！」

「ただちに応戦する！！」

三成と悟は車の窓から身を乗り出し、銃を撃ちまくる。

「三成君！屋根の上！」

紬の言葉を聞くと、屋根にいるクリーチャーに向かってグレネードランチャーを撃つ。

ドッカーン！

と大きな爆発が起こる。

「ムギ、ナイス！」

律が紬に親指を立てる。

ドン！

と三成が律の横を撃つ。

「な、何すんだよ！」

「…後ろ見ろ」

律は恐る恐る後ろを振り向くと、後ろにはすでに死んでいるクリーチャーがいた。

「もっと周りに気を配れよ」

三成は車の後ろに置いていた予備の銃を律に渡す。

「えっ…」

「もし、危機が迫ってきたら、自分の身は自分で守れ」

三成は他のみんなにも渡す。

「でも、武器なんて使ったことない…」

「相手に銃口を向けて、引き金を引く、これだけだ」「これだけってわかるかぁ!!」

「いちいち注文が多い奴だなあ。」

「わかんないんなら気合いでどうにかしろ」「無理言うなよ!!」

「一方その頃」

街の中ではもう戦いが始まる直前であった。

両軍は睨みあいをする。

「皆の者！家族への手紙を書いたか!!」

「「はいっ!!」「」」

兵士たちはふところから小さく折りたたんだ紙を出す。

手紙を開くと兵士たちは一斉に手紙を投げる。

手紙は風に乗るように上にあがって行った。

「行くぞ!!!勇者たちよ!!!!」

先頭にいた男は剣を天にかざし、クリーチャーに向け馬を走らせた。
続いて兵士たちも走りだす。

「「わああああー!!!!!!」」

兵士たちは銃を撃ちながら走る。

「続け!!!!」

ダダダン!!!!
と爆発が起きる。

一方その頃

三成たちもクリーチャーたちを切り捨てながら進む。
ドン!!!
と西の方から爆破が起きる。

「なにになになに!!?」

「あっちもおっぱじめてきたらしいなあ!!」

「そうみたいだな!」

「危ない!!」

紬が叫ぶ。

三成の目の前にはクリーチャーが待ち構えていた。
ドン!!

と銃声と共にクリーチャーが倒れる。

撃ったのは……律だった。

「…立派な戦士だ!」

三成はそう言い律の顔にかかった血をふきとる。

「友よ、共に旗を揚げよう。

そして梓を救い出し、共に生き残るんだ」

「……うん!」

「一樹! 止めろ!」

キィィ!!

一樹は急ブレーキをかける。

「」「えっ?」「」

その急ブレーキによって後ろにいた5人は頭を打つ。

「か：一樹？」

「なんだ？」

一樹は後ろを見ると、そこにはおでこにタンこぶを作っている5人だった。

「ブレーキぐらい慎重にやってくれ…」

怒りが少し混じった声であった。

「そんなことより早くその梓ちゃんを助けるぞ」

一樹はふところから拳銃二丁出し外に出る。

外はシン：としている。

一樹は拳銃を構えるが、辺りはクリーチャーの死体がいた。

一樹は静かに銃を下ろす。

「どうやらあらかたかたかたづけられた跡があるな」
「そう思うか？」

あたりに銃の弾が散乱しており、血が飛び散っていた。

「なんだよ…この不意気は
まるでホラー映画だ」

「おい！三成！」

「どうした？ってぬお！？」

車の中では丸まっている濡がいた。ぶつぶつとなにか一人ごと聞こえる。

「ダメだ…これは完全に重傷だ…」

「しかたない…おぶっていくか…なっ！悟」

「って俺かよ！」

「当たり前だ！ここでもたもたしてる時間はねえ」

「そのセリフ直接この丸まってる子に言えよ！！」

結局おぶることになった悟。

その間三成と一樹は十分に辺りを見ながら進む。

壁の隙間、ビルの入り口、無人の家の窓などを徹底的に見ていく。

「なんかずいぶんと静かだなあ、人の気配もしないし」

「まあ、戦場だからなあ」

「だからだよ、静かすぎる」

とそこに

『応答してくれ…頼む!』

と兵士の死体から声がする。

「無線か？」

一樹は死体が握りしめていた無線機を取る。

「もしもし？」

『ああ! やつと繋がった! 援軍を送りこんでくれ!』

「どうしたんだ？」

『どうしたもこうしたもないよ! とんでもない化け物の相手させやがって!!』

「化け物？」

『ああ! でっけえ化けもんだよ! 仲間のみんなやられた…』

一樹は三成に「知ってるか？」とアイコンタクトをするが、三成は首を横に振る。

「どんな化け物だ？」

『そりゃあバカでかいのなんの！なんか棍棒みたいなもん持って…
ひっ！？』

「どうした！？」

『や…やめ…たすけ…ぎゃあああああ！！！！』

その悲鳴に最後、その兵士の声は聞こえなかった。

「おい、聞こえるか！おい、返事しろ！！」

無線機にはノイズしか聞こえなかった。

一樹は首をゆっくり横に振った。

「ダメだ…切れた」

「今の話といい、ヤバイんじゃないか？」

「ああ…とんでもない奴がいる…とんでもない大物が」

「……今俺たちにできることは…」

三成、悟、一樹はお互い顔を見あう。

そして、手を重ねる。

「仲間のために！」

「義のために！」

「日の本のために！」

「『そして…!』」

そこに割り込み、手を重ねる唯たち。

「大一大万大吉のために!」

7人は大きな決意を胸に今、戦場におもむく。

〽一方その頃〽

梓は必死に走る続ける。

「ハア…ハア…! (ここから逃げないと!…でも…どこに?…もう三成先輩たちには会えない…会えるわけがない!)」

辺りは大破した車、クリーチャーの死体、人の死体。
もう辺りは地獄のようなものだった。

「…私は…」

絶望におぼれ始める梓、そこに

「梓ちゃんーん!!」

とレイの声がきこえる。

梓が後ろを向くと、そこには額から血を流しているレイがいた。

「レイさん…」

「探したぞ…ハア…ハア…」

レイは地面に剣を刺して膝をつく。

「なんで…私を」

「梓ちゃん…何で飛び出していった？」

「だって…私は三成先輩を…」

「そんなことか？」

「えっ…」

レイは剣をはなし、梓の肩を掴む。

「梓ちゃん…三成に惚れてんだろ？」

「…っ！」

「さっき悟からメールが来た。どうやら君を探しに三成は無理して動いている。梓ちゃん…自分の気持ちに素直になれ。もし三成に大

怪我させたことを悔やんでんなら、三成と合流してここから出る。
それが君にできるせめてもの罪滅ぼしだ」

「……」

「そして、自分の気持ちをあの馬鹿に伝えろ」

「自分の…気持ち…」

「三成は超がつくほどの鈍感軍師だ。だが、俺たちがサポートしてやる！」

親指を立ててニコツと笑うレイ。
梓も決心がつき、立ち上がる。

「はいっ！ー！」

13話「戦場」(後書き)

大きな決意を胸に戦う戦士たち。

決心をつけて、愛する人の元に行く少女。

彼らはいったいどうなるのか!?

次回

「悪魔の使い、巨人ガンジンVS石田三成!」

14話「愛する馬鹿たち」(前書き)

遅くなってしまうってすいません!!!
テスト週間であまり時間がなかったもので、次回予告を変えました!

14話「愛する馬鹿たち」

「現在3時12分：状況は？」

『こちら商店街の東方部で大規模な戦闘を始めた模様。このままでは我が軍は負けてしまいます！援軍を送ってください！』

「……援軍は送れん：主戦力で頑張ったまえ」

『待ってください！援軍を：援軍をおくっ……』

ブチッ

男は無線を切る。

「フン：どうせ君たちはそこで死ぬんだ……そんなわかりきって援軍なんて送ったら、ただの戦力の無駄使いだ……」

バン！

男の部屋のドアが勢いよく開く。

「どうしたんだね？信也隊長……」

「どういふことだ！？勝手に出兵して！オズハ少佐！」

オズハは椅子から立ち、窓から空を仰ぎ見る。

「なんだ！この作戦書は……！」

「『2万の兵士を戦場に行かし、街をクリーチャー、2万の兵士たちと共に閉鎖』」

「…見ての通りですよ、信也隊長、愛さん…」

「ふざけるなあ!!」

信也はオズハの胸ぐらをつかむ。

信也は怒りをあらわとしていた。

それは、そもそもこの作戦は信也が考えたものではなかった。

オズハ少佐が作戦書を作り、上の人（信也）に認証せず勝手に動いたことなのである。

「……」

「認証もせずこんなことを!」

「信也隊長、あなたは状況を見ているのか?」

「なに…!?!」

オズハは信也の手をどける。

「考えてみる、怪物たちの数は多すぎる、それでこっちは…残存兵、主力兵、義勇軍を合わせて6万、相手は40万、どうやって勝つおつもりで?」

「うつ……」

オズハの正論とも言えることに黙りこみ、うつむく信也。

「それとも！もしかして正面から戦争を起こしたかったんですか？
6万もの多くの人が…いや、それ以上の人を犠牲にしてまで！」
「っ！誰もそんなことはいってないっ！！」

「それとも、あなたの息子さんにでも、なにか策を編み出してもらおうと？」

三成のことである。

「ああ…そういえばさっき私の部下があなたの息子さん、三成くんを見たらしいですよ」

「えっ！？」

「三成くんが！？」

「なんでもすごい真剣な顔をしててねえ、お仲間さんと商店街の方
に行ったって…梓…だったっけ？その子が商店街に走って行ったか
ら追いかけて行ったって…馬鹿な子ですねえ、もうすぐ街は閉鎖さ
れるのに…ほんと馬鹿だ…馬鹿馬鹿しい、あんなバカ息子を持って
苦労でしょう、信次さん。」

ホント、親も親なら子も子だなあ…」

「貴様っ！！」

パン！

信也が殴ろうとしたとき、横の愛がオズハをビンタで殴った。

「あ…愛？」

「私たちのことはかまいませんが、三成くんのことを悪く言うのは
許しません！三成くんはあなたが思っているような人ではありません

ん！三成くんは、いつもやさしくて…でも、少しつんけんしたり、口も悪いけど、人を思いやって、困っている人がいればやさしく手を差し出してくれるような人です！！」

愛は思っていたことを全て言うと、そのまま外へ飛び出した。

「愛っ！！」

信也も続いて外に出る。

「……」

オズハはひっぱたかれた頬をさすりながら電話を取る。

「至急、兵を集めろ」

くその頃く

三成たちは、クリーチャーとの激戦により、体力は消耗し、弾薬も底をつきそうになっていた。

「ハア：ハア：」

「大丈夫か？三成」

「だ、大丈夫だ：それより、弾薬はあとどれくらいある？」

「グレネードが3発分、マシンガンの弾倉が4個、ハンドガンが1発分と弾倉が1個」「まいったな」

一樹は頭を重そうにしてかかえる。

だが、一樹を含む全員は同じことを思っていた。

三成は怪我をしており、剣で戦う場合、必ずスキが生まれる。

一樹はそこその強さだが、5人を同時に守るのは不可能。

悟の守れるのは二人が限界でもある。

みんなに武器をわたしても心もとない。

「とにかく早くレイたちと合流するのが先決だ」

三成はマシンガンを持って立ち上がる。

「まあ、そうだな：」

「みっちゃんは本当に何も考えずにさっさと行っちゃうんだから」

続いて一樹と悟が立ち上がる。唯たちもそれに続き立ち上がる。

「でもどこにいるんだ？」

「それなら大丈夫だ、ちゃんと手筈はすんでる」

「は？」

「中央道に行く、あそこなら広くてわかりやすい」
「まあ、たしかにな」「さっそく行くか」

「一方」

街での死闘を繰り広げる三成、レイたちに対し、まだ街で戦っている民間人がいた。

「あ、荒井の親父！」

「……何や…」

男は刀を研ぎながら、冷静な態度でいた。

「何やじゃなくて！もう化け物がそこまで来てるんです！早よう逃げましょうや！」

荒井はギロツと男を睨む。

「なに言うどんねん！お前は三成ちゃんが守ったこの街を捨てるつもりかい！？」

荒井は男に刀を向けながら、ものすごい剣幕で怒鳴る。

それは、まるで火山が噴火したみたいにドドドド！！と効果音が聞こえそうなほど。

「し、しかし！あと少しでこの街も封鎖されるんですよ！？」

「そんなん知らん！俺はこの街を守る！」

「なんでそこまでしてこの街にこだわってんですか！？」

荒井は横にあるタンスから銃を取り出す。

そしてそのタンスから防具などを取り出す。

「俺はなあ、昔対立してた清流組と戦争をおっぱじめてのう…ほとんどの構成員がやられて壊滅状態におちいつてた時、三成つつう16歳くらいの少年に助けられたんじゃい」

「何でそんなガキが？」

「もともとは俺から起こした戦争やったんや

清流組が…俺の娘を連れさってったことがもとで戦争をもちだしたんや

そしたら…その少年がたった300人だけで4000人もの構成員を倒して娘を取り返して来てくれたんや」

「そんなことが…」

「だから、おれは聞いたんや『なんで堅気のあるあんたが俺を助けたんか』って

そしたら『俺は街を汚すクズがきらいでな、その汚す元を消しさってやっただけ』って言うてくれた」

荒井は武装をし、刀を片手にドアを開ける。

「だから俺は…三成ちゃんが守ったこの街を守る！」

「一方」

軍の指揮を取っていたオズハは兵を収集、桜が丘高校の校門前にて出陣した。

「さて、オズハ！」

信次もすぐに駆けつける。

「これは何だ？」

「……三成くんたちが戻るまでの足どめですが、もしあと2時間以内に戻らなかったら…街は封鎖します…！」

「お前…！」

信次は少し笑みを浮かべる。

「礼にはおよびません
むしろ礼はあなたの娘さんに言ってください」

オズハはフツと笑うと兵士を行進させた。
信次もそれに続き、自分の馬で走っていく。

くそのころく

三成たちはなんとか中央道につくことに成功し、レイたちを待っている。

三成はイライラしながら二人を待つ。

「みっちゃん、そうカリカリしないで、もっとらくらくにしようよ」

「あ？ ああ…」

だが三成はカリカリしたまま。

「（無理はないか…自分のせいで仲間が危険な目にあってんだから…）」

三成は内心焦っているのかもしれない。

梓の事と、この行動も。

「もしかしたら…これが俺の最後のミッションかもしれない…」

三成はボソツ…と小声で言う。

ドン…ドン…

「!?!」

ドン…ドン…!

いきなりの地震、その地震は三成たちに近ずいていた。

「なんだ?」

武器を構え、攻撃をいつでもできるようにする。

「おい!」

とどこからか人の声がする。

「…どっかで聞いたことがある声が…」

「レイだ…レイが来たぞ!!」

そう、そこにいたのはまぎれもなく、レイと梓と…

「おい！！助けてくれ」
『うおおおおおおお！！！！』

巨人がいた。

三成たちは、さっきまで笑っていた顔が凍てついた。

「「……………」」
『うおおおおおおお！！！！』
「「ぎゃああああ！！！！」」

三成たちは逃げだす。

「ちょっと待てよー！！！！」
「待ってくださいー！！」
「待てるかー！！っつかお前なんつもんつれてきてんだー！！」
「しょうがないだろ！？鉢合わせしちまったんだからー！」
「鉢合わせってどんなルート通ればあんなデカぶつに会うんだー！！」
「なんでもいいから走れー！！」
「くそっ！」

三成は立ち止り、グレネードを構える。

「消え失せろ!!」

ドンドン!

弾は全て命中、辺りは煙で見えない。

「やったか!？」

「…いや…!」

ガシッ!

突然、煙の中から巨大な手が出てくる。

「グアッ!？」

三成は逃げようとしたが、すでに遅し。
三成は巨人に捕まってしまった。

「三成!!」

「三成くん!!」

「三成先輩!!」

巨人は三成を顔に近づける。

「このっ…顔に近づけんな! 汚らわしいんだよこのクズが!!」

ドン！！

三成はその至近距離どグレネードをぶっ放す。

巨人の顔面には爆発が起きる。

だが…

グギッ！

「うっ…！！！」

まだ生きていた。

巨人は怒りをあらわにし、三成の体を思いっきり握りしめ出した。

「ぐああああ！！！」

三成の体から骨が折れるような痛みが走り、三成の視界は真っ白な世界に包み込まれる。

「（死ぬのか？……俺は…ここで…）」

「三成！！！」

ドンドンドン！！

レイは巨人の顔面にハンドガンをぶっ放す。

その弾丸の一発が巨人の目に当たる。

『ギャアアアアー!!!』

巨人は手に握りしめていた三成を放す。

「三成!!!」

三成は倒れるが、起き上がらない。

「三成!!!」

「くっそ!!!」

悟はポケットから閃光手榴弾を出し、地面に叩きつける。

「あばよ!!!」

辺りは光で包まれ、悟たちはそのスキに逃げる。

悟もレイも勝てるわけがなかった。

あの三成がやられてしまったのだから。

（20分後）

「「ハア…ハア…」」

走り続け、レイ達は出口まであと少しのところに行った。
だが、三成は…

「……」

「凜ちゃん…どうだ？」

凜は首を横に振る。

「そんな…！」

「息はまだあります

でも、もう戦える体ではありません…たぶん、もう戦うことはむりです…」

「……」

今の三成は死んだも同然である。

もう二度と戦うことができなくなったのだから。

「マジかよ……三成が……もう、戦えない？」

「はい、おそらく…一生です」

「嘘だ…！」

レイは怒鳴りだす。

そして、レイは三成の方に顔を向け、涙を流す。

「三成…お前2年前言ってたじゃねえか…！共に世界を救うって…！
いっしょに、第一大吉の世を作ろうって…！！頼む…三成…
起きてくれ！そしてまた共に戦いぬこうじゃねえか…！！」

「レイさん……」

「レイ……」

「起きやがれ！！このクソ軍師！！毒舌で、ツンデレで、鈍感で、
唐変朴のクズ軍師……！！」

＼三成 side＼

ここはどこだ？

辺りは真っ白だ…

ここは…

『おい……』

へっ？

今、誰か呼んだか？

『おい…そこのクズ…』

俺は声ができる方向に首を曲げる。
そこには、俺と同じ顔をしている男がいた。

『貴様、名は？』

「…今田三成…」

『…三成…』

男は俺を見ながらため息をもらしだす…って

「なんだ、失礼であろう」

『…フン…こんな男が我が子孫だと思うと嘆かわしくてな…』

「はっ？」

子孫？

「アンタ、名前は？」

『……石田三成……』

それは、俺の本名…今は封印した名前だ。

「で…その俺の子孫…石田三成がなんだ」
『驚かんか…つまらん』

このお方は俺になにえを求めているのか……
実にそこが興味深い……

「いままでいろんな驚くことがあった
こんなんで驚いていられるか……」

『ふふっ……まあ、そうであろうな』

三成……もとい、子孫の三成は、まるで俺をあざ笑うような不気味な
笑みを浮かべる。
いや、これは挑発であろう。

「変な笑みを浮かべるのはやめていただきたいのだが……」 『さすが
に挑発も効かんか……』

「当たり前だ、そんな古典的な挑発はそこらへんのチンピラか、愚
か者しか通じん」

『ふふっ……俺によく似ている』

「で？ 何で俺の前に現れた……」

『いや、愚か者の顔でも見にな』

いきなり喧嘩を売るような言い方をする三成、もとい石田三成。

「愚か者？ 俺のことを言っているのか！？」

『当たり前であろう』

守る者を守ると言っておいて守れず、過去から逃げているクズが』

「何だって！」

『だったら！なぜお前は石田ではなく、今田と名乗っている！それは、過去の出来事を忘れたい一心で背を向けているからではないのか！！？』

たしかに、俺は今は今田と名乗ってる。

それは、過去にあった石田三成という名前だけで差別のようなひどい出来事から逃げたかっただけかもしれない。

正直、何も言い返せない。

この人が言っていることは全て事実なのだから。

「…たしかに…な…」

『……』

「たしかにあんたの言う通りだが、まだ俺はやる必要がある…この街を救う、世界を、そして…」

愛する者たちを…！」

『…わかった…お前に我が力を貸そう』

すると石田三成は両手を広げ、空中に浮かぶ。同時に、俺の体が光輝きだす。

『この力で世界の悪しき力は無くなるであろう
だが、お前の存在は無くなる』

「かまわん」

もう、あとには退けん…いや、退きたくない！

『……もしかしたら助かるかもしれん
頑張れ、今田三成！』

「……はいっ！殿！！」

俺は光に包まれ、目を覚ます。

～三成 side 終了～

「起きやがれ！！このクソ軍師！！毒舌で、ツンデレで、鈍感で、
唐変朴のクズ軍師！！！」

「…誰がクズ軍師だって？」

「「「えっ……」」」

そこには、鬼畜そうに笑みを浮かべている三成がいた。

三成はすっと立ち上がり、目を開ける。

三成の目は左が青に、右が紫になっていた。

「三成：お前：！立てるのか！？」

「見てわからんか？この通り立っておろう」

少し口調も変わっていた。

「み…み…」

梓が三成を見つめ、今にも泣きそうな顔をしていた。

「なにを涙目になっておるのだ：梓、俺はここにいる」

「う…うう…三成先輩！！」

梓は三成に抱きつき、ついには三成の胸の中で子供のように泣きじやくりだした。

「……フツ……」

三成はそっと梓の頭をなでる。

「すまんかったな：みんなも、すまなんだ…」

「いいや、これも仲間のためだし」

「そうよ、私たち仲間じゃない！」

「みっちゃん」

「お前それ言いたいだけだろ？」

「…フツ…そろそろ行かないとな…」

三成は梓の肩を持つ。

「俺は行く…お前たちは先に行っててくれ」

「「えっ!!?」」

「そんな…! 兄さんは!？」

「俺はあとで行く」

「先輩!! もう行かないでください! もう先輩を失うようなことしたくありません!!」

梓は、まるで子供のようになわがままを言い出す。

三成は「フツ…」と笑うと、首にかけていたネックレスを取ると、それを梓の首にかける。

「これは俺の家系に伝わる物だ。もし俺が死んだらネックレスの輝きはなくなる」

「えっ…?」

「いつか帰ってきてやるから、大事に持っておけ!」

三成は最後に梓に笑顔を見せると剣を構え、歩み始める。

「先輩！」

ピタッと歩みを止める。

「私は……」

三成先輩が好きです！！」

「っ！！……さらばだ！！我が愛する者たちよ！そして…最愛の後輩よ……！！」

「三成！」

「三成くん！」

「兄さん！」

「みっくん！」

「三成先輩！！」

みんなは出口に向かっていく。

「（これでよかったんだ…これで……愛姉…後は頼んだ）石田三成
……参る！！！！！！」

7月13日

突如、空から謎の光が現れ、世界を包み込む、そして、各地のクリチャーはその光により全滅。

こうして、世界は今田三成…いや、石田三成により、世界は守られた。

世界連合は解散し、クリチャーに与えられた被害地を直している。この戦争で死んだ死者は60万人はくだらなかった。かくして、世界はまた、平和に戻る。

～1年後～

それから、1年ほどがたった。

「…もう、1年か…」

「早いもんだね…」

「うん…」

「先輩は…今…」

「あいつは…生きている」

突然、音楽室のドアの前にいたレイ。

「レイさん…」

「なにを思ってたんだよ…三成は生きているよ」

三成がくれたネックレスの輝きは無くなっただけじゃないんだから」

「そ…そうだな…」

「そうね…」

「そうですよ！三成先輩は生きています！私は信じています！！」

「そうだな！そうだ！」

「なんか元気が出てきたよ！！」

「よし！だったら俺が三成の変わりにお前たちの演奏聞いてやる！お前ら！さっそく練習だ！！」

「「「おーーーー！！！！」」」

そう、三成は生きている。

その証拠に、ネックレスは輝き続けている。

14話「愛する馬鹿たち」(後書き)

いや〜おつかれさまでした〜

いや〜いま考えたら俺…文力ねえ…

まあ、今回は20年後の世界です三成と新たな仲間たちによるとたばたバトルラブコメ!

次回をお楽しみに!

タイトルは『IS・インフィニット・ストラトス・伝説を継ぐもの』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2143q/>

けいおん！ ～義の心と愛する馬鹿たち～

2011年5月26日09時07分発行